

「ハッ」

といふばかり、其時、鳥も、「ハッ」と云つた。頓狂な奴だ。竹千代は重ねて

「鳥には、それ／＼持前の鳴聲がある。まさか雀の鳴聲を、鶯は真似をすまい。鳥の鳴聲を鶴は真似をすまい。然るに、此八官鳥とやら申す鳥、自からこれといふ鳴聲を得せず、たゞ他のもの、真似ばかりいたすは實に卑しむべき鳥ぢや。武士も同じ事、人真似ばかり致し居るものは、眞の武士ぢやない。予はかゝる鳥を見るのも厭ぢや！」

と八才の口から出たにしては、殆んど驚くべき言だ。近習の面々はたゞもう恐れ入つた。「ハッ、それでは、先方へ返しつかはしませうか？」

と伺ふと、

「イヤ、折角の好意、返すのも氣の毒ぢや。たとへ卑しき鳥類でも、籠の中に居ては、予の様に苦しからう。籠から出して野山を自由に飛ばしてやれ！」

と承つて、皆の者は、其境遇をお察し申して、たゞもう恐れ入つて了つた。

幼い時から苦勞をしてゐる人は、普通の人間でも云ふ事が違ふ。况や古來何人といふ家康に於てをやだ。

天文の十八年三月六日、人は花の春に面白く遊ぶ頃、竹千代の父、廣忠は死んだ。母には生別れ、父には死目にあはず別れた竹千代の不幸、此上はあるまい。

此三日違ひて、信秀も死んだ。敵の大將も味方の大將も、殆んど

同時に無くなつたのだ。此時織田家には信長がゐる。其織田家には後の家康其時の竹千代が捕へられてゐるのだ。如何に戦國の世の分らぬものとはいへ、此後數十年にして、家康は織田家無二の味方となり、信長の死後にも、信雄と共に秀吉に戦つたこともある。今日の敵は明日の味方、あゝ分らぬものだ。

それはさておき、大將を失つた岡崎城(廣忠の居城)は、實に見じめなものだつた。肝心の大切の若君は敵の囚人だ。

降参? 織田方に降参すれば、若君の御命は安全だが、併し先君の御名前を汚すといふものだ。

開戦? それは死物狂ひてやればやれない事は無いが、さうすれば、如何しても若君の命は危い。

今川織田の兩大名に狹まれて、岡崎城は主なき孤城、もはや自滅

の外はない。

『さあ、もう岡崎は落城だ!』

と見て取つた今川義元、たゞちに兵を岡崎に向けた。いはゞ此時今川は、岡崎の味方否尻押だ。といふものゝそれは一時の方便で、つまり事實によつて、岡崎は今川に占領されたのだ。

肝心の領土は今川方にしてやられる。御主君の若殿は、敵の囚人、もうかう成つては仕方がない。手をつかねて、兩家がするまゝに任すより外はない。

さて、岡崎をまづ手に入れた今川義元は、いよく織田征伐と出掛けた。岡崎の將士の心はどんなだつたらう。織田方には大事の大事の若君が居る!

こゝに三州の安祥の城には、織田信廣がたてこもつてゐる。これ

は信長の兄だ。今川勢はこの安祥の城を、十重二十重と取り巻いた。その先鋒は岡崎勢だ。即ち家康の家來共だ。

今川勢と岡崎勢に、かく圍まれては、信廣殆んど仕方がない。今は日ならず落城をせねばならぬこととなつた。

處が、今川方の大將、雪濟和尚が、妙な交換問題を織田方に申し入れた。

『この安祥は、落城目前にあり。しかし、織田家の公達を殺す事、如何にも當方においては忍びざる處、今こゝに信廣殿の一命をお助け申す。其換りとして、兼て貴方に預かり居らるゝ竹千代殿を當方へ返して貰ひたい！』

といふのだ。

如何様これは道理な申出、織田方でも信廣の命は助けたい。意地

にかゝつて竹千代を奪つたものゝ、今日何の勢力もない岡崎の公達を、預つておいた處が、却つて荷厄介だ。すぐと承知の旨を申して、信廣は出城、竹千代は返さるゝ事となつた。權現様は幸運な人だ。そこで竹千代が歸されて、さてもとの岡崎城主で自由が出来るかといふに決してさうでない。

まづ岡崎城に入つて、十日ばかりヤレ〜と足を延ばしてゐると、今川のもとから、

『出府せよ！』

といふ命令だ。事實も此時は今川からは家來扱ひにせられて居つたのだ。長いものには巻かれるだ。仕方がない。今度の戦争で、妙な交換問題から、歸城が出来たのも、今川のお蔭だ。如何しても出府せよばなるまい。

頃は天文十八年十一月の二十二日の事だ。竹千代は百人ばかりの將士を隨へ、今の静岡即ち其頃の駿府へ出向いた。

行つて見ると、今川の勢といふものは大したものだ。お客様扱ひ處か、すぐと命じて、竹千代は駿府へ置かるゝ事となつた。しかも四人の家來と三人の子供をつけられただけ、事實における拘禁だ。イヤハヤ、竹千代も他の家來も驚いたが、大體腕づくの世の中には仕方がない。すはと云はゞ人間は實力だ。仕方がない。今の韓國でも、戦争、といふ一段になると、一萬に足らない兵士で、どんな小國とても戦ふ事は出来ない。口ばかり賢くても、すは喧嘩となると、強い者が勝つのは是非がない。

名古屋から静岡へ變つた、といふだけの事で、竹千代は相變らず捕虜だ。それで將來八百萬石の將軍家が、この時のお手當僅に千石

だ。

千石では到底足らない。今少し頂きたい、と家來から、義元に願つたが聞き入れない。是非なくも家來の鳥居伊賀守忠吉が、金持であるので、それがまづ補助をして、辛くも其日を暮して居つた。

岡崎城の面々は、日夜涙にくれた。しかしこの無念を忍んで、時節を待つたからこそ、三河武士は天下を握ることゝなつたのだ。所謂安祥山中以來云々と云つて、此辛苦を語るのは、後の世の名譽となつたのだ。

さて、竹千代が駿府にある中に、安部川堤の石合戦を見に行つたといふ話しは名高いものだ。謙ちゃんも無論知つてゐるだらう。小勢の方が必らず勝つ。それは氣が揃ふからだ。と竹千代が云つたのは、慥に彼れが後の戦法をよく説明してゐる。三河武士は實に氣が揃つ

て居つたので、大成功をしたのだ。小牧長久手において、三萬の兵を持つて、秀吉の十三萬の大軍を惱ましたのも、この氣が揃つてゐたからだ。弘治元年、正月の十五日、竹千代は十五歳となつた。昔は十五才になると元服といふ事をする。即ち一人前になるといふ事だ。十五で一人前とは、少し早過ぎる様だが、まづとにかく其れが習慣だ。

そこで竹千代元服して、元信となつた。名づけ親は義元だ。自分の名の元の一字を與へたのだ。

翌年に元康となつた。ぼつ／＼家康に近くなつて来る。さて其年の二月、義元に少しのお暇を頂いて、墓參の爲めに元康は岡崎へ歸つた。

歸りはしたが、もとの自分の居城たる岡崎城へ、大手を振つて還

入る事が出来ない。本丸には今川の將、山田新左衛門といふのが威張つて居る。コソ／＼と二の丸へ這入つて、そこで元康は家來に面會した。

『あゝ、何たるお情無い事であらう！』

とは此時三河武士が一同に感じた事である。中にも烏居忠吉は、若君の手を握り、涙を流して、

『若君、拙者はもはや年老い、戰の御役に相立ちませぬ。幸に今日まで、儉約致して蓄へた金銀米穀、これを残らず獻納仕つります。』

と聲をふるはせていつた。元康は

『オ、爺や、よく云つてくれた。いつに變らぬ忠節、手は過分ぢや！』

とこれ亦涙に暮れられたとある。

この後、家來が、再三の願ひで、漸く歸城は免されたもの、所得は僅に四千石、殊に本丸には遣入れない。

前後十二年の捕虜となつた家康は、この後、今川が織田に亡ぼされるに及んで、織田の客將となり、甲斐の信玄と戦つて、益々戦術を練り、遂に海道一の弓取と賞され、信長没後は、秀吉を助けて天下を一統し、さて秀吉没後は、遂に武將の棟梁、征夷大將軍となり、三百年の天下太平を成した。

これから後は面白いが、とても手紙ではかけぬ。歸京の後、一番關ヶ原軍記でも講じよう。

謙ちゃん！家康の辛抱を思へば、人間は何でも忍耐が肝心だな。時來れば、花も咲き、實も結ぶ。権現様のお話しは、まづこれで止

めよう。

もう夜は深けたらしい。聞こえるのは相変わらず水の音ばかり。明日は足尾見物に行くつもりだ。歸京は五六日の後！(十一時)



大那翁

第一 大頭の小男

「拜領の頭巾梶原縫ひちぢめ」といふ狂句がある。これは、頼朝公の頭が、普通の人以上、大層大きかつたことを云つたもので、其大頭おほたまの頼朝公よりともから、梶原景時かじはらかげときが頭巾かぶとを拜領はいりょうした處、あまり大きくて頭に合あははないから、これを縫ぬひちぢめたといふ意味だ。

頼朝公よりともの頭あたまの大きかつた事は、種々の言傳いひつたへにあるが、一體凡たゞて智慧みのある人は、頭あたまが大きいといふ話だ。そこで、西洋せいようで不世出ふせしゅの大英雄たいえいゆうと云はれて居る、かのナポレオン第一世なぽれおん だいいっせいは、これも、生なまながらにして、大層大頭おほたまであつたさうだ。あながち、智者ちしや必かならず巨頭きよたまであ

るともいへないだらうが、とにかく、彼は歐洲おしやを蹴散けりちらした大英雄たいえいゆう、これは日本武將にほんぶしやうの棟梁きりやま、それが、どちらも大頭おほたまであつたといふとだ。

大頭おほたまたるナポレオンは、又身體またしんたいが小さかつた。「大男おほおとこ、總身そうみに智慧ちゐが廻まり兼ね」といふから、小さい身體こゝろの人は、賢かしこいのかも知れない。

日本の太閤様たいこうさまは、大變おほなるな小男こをとこであつた。こゝで、那氏なし（ナポレオンの事こと、以下いひかこれに倣なまふ）は、其大頭そのおほたまが頼朝公よりともと一對いっついでで、小柄こがらは、太閤様たいこうさまと似にてゐるといふ事になる。しかし、これはたゞ偶然ぐうぜんの出來事できごとで、なにも身體からだが小さいからとて、賢かしこい、強いと定きまつた事ことはない。一寸いちすん法師ほうしが賢人けんじんでも聖人せいじんでもない。加藤清正公かとうけいせいこうは非常ひじょうな大男おほおとこ、ビスマルクビスマルクでも、グラットストーングラットストーンでも、いづれも大男おほおとこだつたから、小男こをとこだからとて、えらいといふ筈はずはない。こゝにはたゞ、那氏なしが、巨頭きよたま短身たんしんの人ひとであつたといふことを、東西對照とうせいたいしやうして云つて見たまでだ。

さて此巨頭短身の大英雄は、如何なる地に生れ、如何なる少年時代を經過したか。

第二 英雄は英雄の毛氈の上に生る

欧州の地圖を開いて見ると、その大きな池ともいふべき地中海に、澤山な島がある。その中で、伊太利ゼノワ灣の南部にある一つの孤島は、これをコルシカ島といふ。この島の町をアヂヤシオと云つて、其處にチャレースポナバルトといふ人が、其妻、レーチシャ、ラマリノと共に住んで居つた。

今から、百四十年ばかり前、西暦千七百六十九年、恰度、八月の十五日、其日は聖母昇天の記念祭日といふので、ラマリノは聖堂へお参りに行つた。此時ラマリノは、妊娠して居つて、しかも臨月であつた。

あつた。

『どうも途中が危いから、今日は止したら如何だ？』と、傍の人が止めるのを聞かず、ラマリノは聖堂へ行つて、さて歸つて来ると、急に腹が痛み出し、間もなく生み落したのは、玉の様な男、即ち前に申した、頭が割合に大きく、身體が普通より小さい、將來の佛國皇帝たるナポレオン一世であつた。

さて其生み落した處は、ホーマーといふ大詩人が、歌つた希臘の英雄を描いた古毛氈の上であつたのが、一寸面白い。未來の大英雄は、古代の英雄の畫の上へ、おぎやあ、と飛んで出たのが、妙だ。

景色の能い處には、英雄豪傑が生れる、とふ言傳がある。すると、三保の松原や、田子の浦や、須磨や明石や松島や宮島からは、豪傑がゾロ／＼出さうなものだが、まさか、左様ばかりとも限らない。

たゞし、都會から見ると、田舎の方が、大人物が出るといふのは、歴史に徴して明らかで、これは幼さな自分から、其腦を、自然の大自然の力によつて、養はれるからでもあらう。東京の魚川岸や、大阪の道頓堀からは、昔から、まづ一人も豪傑は出ない。否、東京大阪はあるかゴタ／＼した町の中に生れたものには、英雄豪傑は少い。と云つて、町中の人、わざと山の中へ引つ込む必要もあるまいが、兎に角、山水秀麗の地、英雄を生ず、といふ諺も、まんざら當にならぬこともない。

那氏の生れた、コルシカ島は、山高く谷曲に、天然の風物、實に見るさへ心が清しくなる處だ。那翁は生れながらに極めて剛膽で、皮膚の色は薄黒く、双眼はキラ／＼として、所謂人を射るといふまなざし、頗る尋常の兒と違つて居つた。此子が、毎日々々歩く處は、

或は岩の上、谷の底、天日を掩ふ森林の中、野に走る獸、空かける鳥、皆彼の友となつて、彼に興味を興へて居つた。

此山紫水明なる一孤島から、世界第一の美しい都會たる、パリの都へ出たのは、那氏が七才の時であつた。今まではたゞ、自然の風物にとりかこまれて、犬や羊と共に、嬉々として遊んでゐた那氏は、父に伴はれて、人為の壯觀を極めたる、パリ街頭に立つた時、彼は何と感ぜたらう。信州の山奥の人が、東京銀座の中央へ突出されたより、まだ大層に驚いたらう。

が、此寶玉を持って飾られたる如きパリの大都は、數十年の後、此コルシカの田舎小僧の持物となつたのだ。誰れか知らん、此田舎小僧の脚下に、既に歐洲一圓を踏まへて立つてゐたことを。

第三 算術が上手 破格の入學

七才で巴里へ出て、十才で、ブリエンヌの兵學校へ入つた。此時學んだのは、歴史、地理、算術、の三科で、殊に心を算術に用ゐたといふのは、流石、大戦闘家たる彼の少年時代に、注意すべき事だ。布いて、器械、測量、砲術なんかの如きは、大人も舌をまく位に通達して居つたといふことだ。

歴史、殊に傳記……も、那氏が尤も耽つた科目で、好んで、ブリタニク英雄傳を讀んだ。書中の英雄は、皆わが未來を迎ふの様に覺えて、彼の血は跳つたらう。

此外には、古詩を好んだ。殊にホーマーの詩史を熟讀した。那氏がホーマーの詩史中の小英雄の畫の上へ生れたのは、前に申たが、



大那那

所謂藪の上から、那氏は、ホーマーに縁があつたのだ。

幼さなときに、英雄豪傑の好きなは、これは誰しもの事で、日本人は車夫の子でも、太閤様や、牛若丸の事を知つてゐる。幼少年者の英雄尊崇は、敢て珍らしくないが、しかし、其外に、算術を好み、詩を讀んだといふことが、大に問題になる。まづ、日本人で考へると、詩人とか、文士とかいふ連中に、算術など出来る人は少い。數學家に、詩を

知つてゐるものも少い。數學は、一分一厘も、忽にする事の出来な
い學術、詩學は感情のみに訴へる學術、此二つは、實に不調和なも
のだが、しかし、此二者が、うまく調和したものが、眞實の大人物
になれるので、西洋にはかういふ豪傑が随分ある。那氏も其豪傑中
の大なる一人であつたのだ。

十五才の時に、那氏は選抜によつて、巴里の兵學校に入るこ
となつた。これは算術の先生に見込まれて、推舉されたのだ。處がこ
れは大分に故障があつたのだ。

算術の先生が、那氏を推選して、兵學校の検査官に云つた言に、
「此子は算術が驚くべく出来る。地理と歴史とは中位で、拉丁語は、
まづ普通だ。海員となつたら、成功すべきものだから、入學さし
て貰ひたい！」

と斯う云つたが、検査官は

「此兒は、算術は出来るか知らないが、まだ年齢が、入學の資格が
ない！」

といふも道理な話した。

處が、算術の先生は、

「それは御道理だ。入學年齢に達しないことは知つてゐる。知つて
ゐて、此兒を推舉するのは、此兒が全く抜群の技量を認めたら
だ、自分は此兒の親類でも何でも無い。何の因縁も無い自分が推
舉するのは、見處があるからです！」

と、こゝして検査官も、無據、此破格の入學を免した。十五才にして、
既に格を破つて、此推舉にあづかつた那氏は、まづその大名譽の階
子の、一段を登つたといふものだ。

第四 教頭への建議

さて、愈々高等なる學校に入學した那氏は、日夜其學業を勵んだが、熟々兵學校の校風を見ると、あまり寛に過ぎてゐる。いはば頗る貴族的だ。大概の兒なら、學校のやかましく無い、のを喜ぶだらうが、腕一本で後に皇帝の位に登る此麒麟兒は、苦を避け、樂に就くといふ様な、凡々たる少年では無い。そこで、直ちに、教頭のペルトンといふ人に書をおくつての曰くに

「兵學校の學生は、金持の子ばかりではありませぬ。盡く校費を出すことの出來ぬものです。今此學校には、馬丁や僕は多い。そんなものは、宜しく減じて了つて、學生自から、馬を飼ふが宜しい。金が無くつて、軍人に成りたい、といふ人間を教へるに、あまり

寛やかては仕方がない。學生自から、馬丁もやり、労働をしたら、身體も達者になり、費用も省けて、一舉兩得です。何時戰場に臨んで、少しも苦勞を感じない位に、平常から身體を練つておきたいものです！」

と遺憾なく云つた。十五や十六の兒が、此様な事をいふのは、實に驚くべきもので、那氏は一生の間、此教頭に上申した主義を變へなかつた。

兵學校にある間、那氏は學科の進歩が早いので、凡ての教師に可愛がられた。歴史の教師の、ラギルといふ人は、
「ポナバルトは、コルシカに生れて、其國風が氣象に顯はれてゐる。風雲を得たら、彼は大事業をやる！」
と云つた。先見の明ありだ。

文學の教師、ドメーロンは、

「ボナバルトは、火山から噴き出した焼け花崗石の様だ！」

と云つた。烈々たる熱情が、彼の胸に燃えてゐる事を看破したのだ。これも先見の明ありだ。

兩師の目鏡は曇つてゐなかつた。後那氏が、議政官となつた時、此兩氏を招いて、種々優待をし、昔話しをしたといふ事だ。

處がここに先見の明のない教師が一人あつた。それはポールといふ獨逸語の教師で、那氏は如何したものか、獨逸語が巧てなかつた。巧て無いから、自然、其教場へも欠席勝た。ある日の事、那氏が、缺席した時、教師は日頃から憎いと思つて居たから、那氏を呼びよせて、

「お前は、何故、出席しないか？」

と叱問すると、那氏は平氣で、

「ハイ、砲術科の算術の試験に行つて居りました！」

といふと教師は、冷笑して

「フン、お前は、算術が出来るのか？」

那氏は少しも恐れず。

「先生は、私が、此兵學校の學生中第一の算術家といふ事を御存じないのですか？」

と不思議さうに教師の顔を見上げた。教師は益嘲つて。

「さうかい。算術なんかは、馬鹿者が上手になるものだ！」

といひ放つた。

那氏の言語も、随分不遜であつたらうが、教師も随分亂暴な事を云つたものだ。那氏が佛國皇帝と成つた時、常に此事を云ひ出して、

「ボールが居つたら、わしが馬鹿であるか無いか分るだらう」と戯れながら云つたといふ事だ。少年時代の事は、大英雄の胸中に、長く刻まれて居つたと見える。

第五 十六歳の少尉

那氏は間もなく、破格を以て、擢てられて、砲兵少尉となつた。時に彼十六才、今てなら中學の二三年の生徒が、とにかく國家の干城たる將校となつたのだ。

十八才の時に、中尉に進み、フランスの分營へ行き、二十三才の時に、砲兵大尉とまでに進んだ。其翌年の夏の事、夏中休暇で、那氏は、絶えて久しき母をば故郷に訪はうと、海を起えて懐しき山水のコルシカ島へ歸つた。

此時、故郷のコルシカに、バオリイといふ老將軍が居つたが、これより先に此島が、佛蘭西に傾されたのを、如何にも残念に思ひ、如何にも獨立させよう、と種々に手段を施して見たが、もとより地中海の一孤島、しかも何等の兵力もなきコルシカ島を、歐洲の強國たる佛國の手を離れて、獨立などといふ事は、これが所謂螻蟻が斧とて失敗するのは知れたことだ。

そこで、此バオリイ老將軍は、いつそもう、佛國から獨立が出来ぬのなら、英國の屬島としよう、と決心した。

勿論、此頃の歐洲の強國は、英佛の二國であつて、かれに就かねばこれ、此に就かねば彼、といふ工合であつたのだ。常陸山に勝てないなら、いつそ梅ヶ谷の弟子とならう、とまあ云つた様な所であつたが、この事を聞いた那氏は、大に驚いた。

コルシカは那氏の愛すべき故郷である。故郷を愛せざるものは人間でない。まして、烈々たる熱情を有する那氏は、故郷コルシカを愛する事は、實に多くの人より甚しい。それを獨立させたいのは山々である。しかし、前にも云つた様な形勢で、其獨立は殆不可能の事だ。同じ獨立が出来ないなら、今日までの關係もあり、亦地勢上近き佛國に屬する方が善い。かけ離れて、何の縁もない、英國へ屬すなどは、不道理千萬だ、といふので、那氏は大にバオリーに反對した。

まだ年少の王官の云つた事を、バオリーなどは耳を貸さない。そこで那氏は佛國に向つて、出兵を乞うた。

此時、佛の將官セリセツチ、臨時に那氏を護國軍砲隊の指揮官となし、アジャシオ附近にある城を攻めさせた。



處がこなたはバオリ―老將軍、何がさて長く島にゐるのだから其信用も厚い。巧みに島民を煽て、大軍をあつめ、迎へ撃つた。

年少氣銳の那大尉は、勢に任して一度は城を抜いたが、再び又敵の圍みにあひ、激戰數回、衆寡敵せず、其上に糧食も續かなかつたので、

「とても、ダメだ！」

と見込をつけると、彼は直ちに海に航して佛蘭西へ走つた。大英雄の初陣は、孤島の小戦に負けたのであつた。天は將來の大將軍を、まづ此小競合に敗けて走らしめた。

其後、英國は、バオリ―に援兵を多くつて、那氏一家を島外に追うた。懐かしき故郷より敵の爲に追はれた那氏一家は、マルセーユに逃れた。英國は、その初めより、其最後に至るまで、佛國及那氏

の敵であつた。

この後の那氏は、實に其小島の小敗を夢物語りとして、五色の玉を以て飾られたる如き大成功であつた。アルペン山の雪深しと雖、彼はこれを蹶散らして超えた。埃及の砂漠、石も溶けんばかりの暑さも、彼は悠々として軍をやつた。其最後は、亞弗利加の一孤島たるセントヘレナであつたが、那氏程に派手な生涯を送つた人は、今日まで世界に何人も無いであらう。



紳士國のグラッドストーン

その一 富豪の兒

日本は東洋の君子國だ、と稱されてゐる。英國は西洋の紳士國だと稱されてゐる。此貴ふべき兩國は、今同盟をして爲る。世界の一大勢力たる事申すまでもない。

予はこゝに、西洋の紳士國たる其紳士中、尤も模範とすべき大紳士の、グラッドストーン氏の少年時代を、諸君に語ることを如何にも愉快に思ふ。

「グ氏(グラッドストーン)氏の事、以下これに倣ふは、英國の大紳士であるのみならず。實に世界の大紳士であり、大政治家である。グ

氏は、十九世紀の歐羅巴に、立役者として働いた人であるが、これを大昔からの世界偉人の中に見ても、實に稀なる人傑である。其心情の高潔なる、其才能、識學、實に世界歴史を飾るべき巨人である。

さて、この大偉人は、如何にして、其素質を作つたか
一體、英雄豪傑となつた人は、其の初めは大概貧家の子である。

此本の中でも貧人の子にあらざる偉人は、道實、謙信、家康位のものだ。しかも道實公を除くの外、謙信家康の二人は、其少年時代にあつて、實に如何なる貧人の子よりは、まだより多くの苦勞をしてゐる。所謂亂世に育つた武士の子の中でも、尤も多く辛慘を嘗めた人々である。して見ると、平和な家庭に、苦勞知らずに育つて、さて生長の後、大人物となつたのは、事實に徴して頗る乏しい。
如何様、大名の子、富豪の子なんかは、生れながらにして、其名

譽其富が、身體に備はつてゐるのだから、自然人も尊敬する。乳母日傘で大切にされる。坊様とか若様とか云つて甘やかされる。すると、本人も能い氣になつて、何故か我身だけえらくつて、他の人間は皆卑しい様な氣がする。町人百姓を奴隸の様に思ふ。先祖の蔭で、暖く着、餓えず食へるといふ事を忘れて了つて、やたらに空威張をする。其両親も、自然わが子を安逸に馴れしめる様になる。帽子が欲しい、オットよしく、小さな馬車が欲しい、オットよしよし、雨が降るから學校が厭だ。オット休むが能い。あの下女は氣に入らぬから下げて了へ、よし、承知した、といふ風に、云ふ處行はれざるなして、何ても勝手氣儘な事を通さすから、既に將來馬鹿者たるべく、日々育てゐる様なものだ。今の日本は、少しこれが少くなつたが、維新前の日本と來たら、それこそ、大名の子八九分

まで馬鹿で、富豪の子は九分九厘まで、愚物であつたのだ。かういふと、名譽あり財産ある人の子は、偉人となる事は出来ないてあらうか、といふ問が起る。なんの、なんの、決して左様でない。偉人となるには、貧乏人の子より、富豪の子の方が、寧ろ早道である。それに今日まで、事實が左様で無いのは、何故であるか。これは先祖からの遺傳もあり、其子特有の性質もあるであらうが、要するに両親の育て方が悪いからである。わがグ氏は、富豪の子と生れて、而して大偉人と成つた人である。平和なる家庭の中から、飛び出した大英雄である。比較的例の少い富人の子の大成功は、實に此大偉人によつて、多くの金持の親達に、貴き教訓を残して居る。諸君！特に何の不自由なく學窓に専心勉強し得る境遇にある諸君！グ氏が少年時代に於て大に學ぶ處あれ。い

さ説かう。

その二

晩餐後は討論會！ 失つた矢

「グ氏の先祖は、グレッドステーションと云つて、スコットランドのリップトンといふ處で、立派な武士であつた。グレッドといふのは鷹といふ意味で、ステーションといふのは、巖といふ意味だ。巖と鷹なんて、随分妙な名前をつけたものだが、これには因縁があるので、其先祖の居つた土地には、海巖が一面に聳へて居つて、其處に鷹が、巢つて居つたからだ。」

さて、其立派な武士が、中途で大に落ぶれた。そこで所謂士族の商法で、麥商となつた。此時グラッドストーンと二字を換へたのだ。グ氏の父の、ジョングラッドストーンの代に至つて、リップブール

に移住した。此人中々の才物で、種々貿易に従事し、リップブール屈指の豪商となつた。その後は政治界にも入つて、一かどの名士となり、遂に男爵となつた。富豪が政治界に入つて、華族様となつた代だから、此人の技量の如何も察せられるし、又其家が、財産と名望と、兩ながらを有したといふ事が分る。

時は西暦千八百九年十二月の二十九日、人は新春を迎ふる用意に忙しき時、リップブールはロッドネー町六十二番地に、呱呱の聲を上げて目出度男子が出生した。これは此家二番目の子で、即ちこゝに語るべき大偉人のグ氏であつた。

「グ氏が幼年時代より、其逝去に至るまで一貫したる性質は、一たん斯うと云ひ出すからは、決して中途で止めないといふ事である。學べば其理を極め、其奥儀を窺はずんば止めない。戦へば其敵將の

音を見なければ止めない。家庭にあつて、父母と其食を共にする時などにも、一つのお話にも、必ず議論が沸騰する。豪健なる父は、グ氏に向つて、あくまでも詳細に説明する。グ氏はそれからそれから聞く。傍に聞けば、何だか討論會の様だが、父は此子のために、常に其教師の位置に立つて、細密なる説明をしてやる。

例之ば、

「今日は雨だらうか？」

といふ問題が起ると、或ものは風といひ、或ものは、晴といひ、さあ雲は如何だ、空気が如何だ、とこゝに氣象學の討論が初まる。グ氏はこれ聞きながら、分らぬながらも、其討論員の一人となつてゐた。

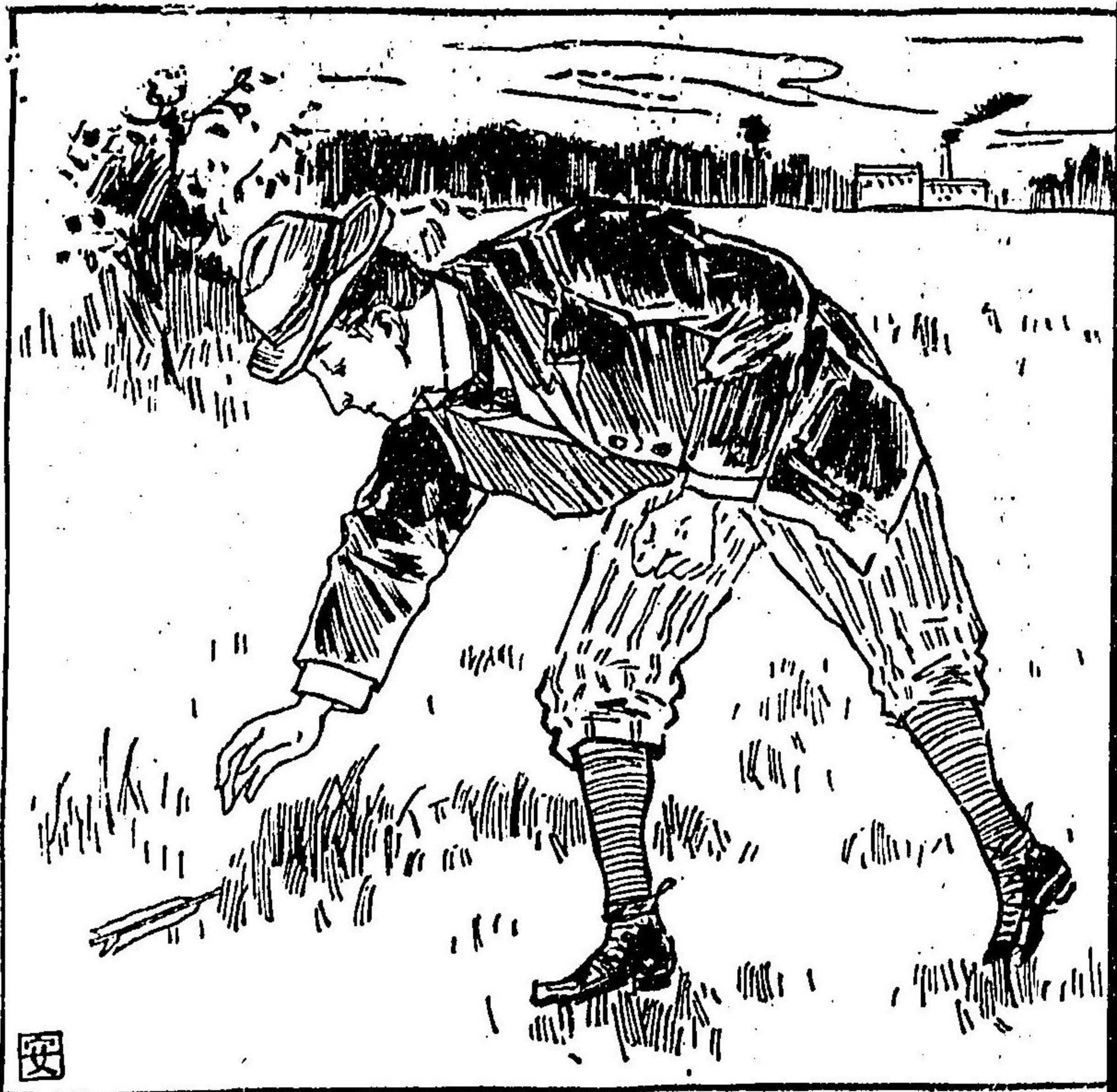
こゝにグラハムと云ふ人が、グ氏の家とは、親族同様の交際をして居つた。自然幼見のグ氏とは、孫と子と程年が違ふが、お友達となつて、旅行をしたり、遊んだり何かしてくれる。

ある日の事、グ氏は此グラハム爺さんに連れられて、郊外散歩に出かけた。道を歩きながら、そこらあたりを見て居ると恰度植付時で、馬鈴薯の苗が澤山に植付てある。さあ、それを見ると、此爺さんと、グ氏との間に一議論が持上つた。あの苗と苗との間は何寸だ、否、さうぢやない、何寸だ、といふ様な調子で、其議論は中々果てない。もとより水掛論だ。とう／＼仕舞には、グ氏は、ポケットから、一つの帳面を出して、グラハム爺さんの云つた議論を、盡く記し、自分の議論も記したといふ事である。僅に苗と苗との間の寸法の事でさへも、グ氏は此様に熱心で、ものが手帳に後日の参考とし

て一々記した。此帳面には此の如き記事が多く記されてあつた。如何に彼に注意深くして、推理的頭脳があつたといふ事が、この事て分る。

更にこの精神を證據だてる事がある。グ氏は大變に弓が好であつた。平生友人と共に、かなたの森の中や、こなたの草原などへ、的をこさへて、拳を争ふことを此上なき楽しみとして居つた。弓術はグ氏のみならず、一般の少年にとりて、精神上にも、健康上にも、非常に利益ある遊びである。

處が此弓術を競へる時、彼グ氏が仲間入をすると、中々面倒で、厄介だ。それは大低の人は、まづ持つてゐるだけの矢を射盡して了ふと、直ぐと手近から其矢を拾ひあつめ、二本や三本足らなくつても、あとで探すことにして、此時はそのあるだけの矢で、又射的を



グラッドストーン

始める。が、グ氏が仲間入をすると、それを免さない。矢盡の矢を射盡して了ふと、すぐと其矢を拾つて、キチンと矢の本数がもとの通りに合ふまで、あとの射的をしない。ある日の事、グ氏は友人と共に、

とある草原で此遊びをやつた。

さて、グ氏は、自分の持つた矢壺の矢を、盡く射て了つて、例の如く、友人と共に矢を集めて見ると、如何したものか、一本の矢が見當らない。

「一本、足りないナ！」
と一人がいふと

「さうよ。如何したんだらう？」

と、草原のあちこちを、眼を皿ノ様にして探したが、分らない。

其中に、日は暮れかゝつて、四方は薄暗くなつて來た。

友人共は探しあぐんで

「グ君、もう日が暮れるぞ。暗くなつては分りやしない。一本位の矢は如何でも探さなければならぬか。諦めて了ひたまへ！」

といふと、グ氏は嚴格な調子で、

「イヤ、そんな弱い事ではいけない。男子が一たん探さうと思つたら、何處までも探す。暗くつて分らなかつたら、明朝キツと探して見せる！」

といふから、友人共が、

「さうかい。それぢや、もう僕等は御免を被るから、君、明朝でも探したまへ！」

「さうだ。僕は何處までも探す！」

といふので、それから皆に分れてグ氏は家へ歸り、さて其翌朝早く起きて、テク〜と昨日の草原へやつて來た。

その三 愛禽獸に及ぶ 初陣演説

彼方の草叢、此方の草叢、探して見たが、蛙が飛び出す位の事で、矢の影も姿もない。しかし、グ氏は少しもへこたれない。三十分、一時間、探せど探せど見當らないのを、尙も探しくくて、とうとう二時間の後、やうやうと見つかった。ヤレ、ヤレ、といふので、其矢を持つて歸つて来ると、ある人はそれを見て、グ氏に向つて笑ひながら、

「グ君、矢はめつかりましたか。その矢の何處かへ寶石でも遺入つてゐるんですか。さうでなければ、何が何でも、貴い時間を二時間もつぶして、一本の矢を探すなんて、随分、馬鹿々々しいぢやないか。」

といはれてグ氏は、少しも怒つた顔をせず。

「ハイ、お蔭で矢はありました。僕は初めから、其探す方法に就い

て頗る考へたのです。僕が考へついたのは、一番迂遠い方法でした。そこで、今少し單簡な方法で、探しあてたいと、種々とやつて見ましたが、其略法は、皆ダメでした。やつぱり最初の迂遠い方法が、尤も善かつたです。そこで其方法でやつて見ましたら、時間はかかりましたが、探し當る事が出来たのです！」

と云つた。一本の矢を探すのに、グ氏は其方法について、大に智慧をしぼつたのだ。「急がば廻れ、瀬田の長橋」といふ諺の如く、尤も善き方法は、尤も順序正しい方法で、尤も安全な方法である。グ氏が、政治界に大雄飛し得たのも、實は其尤も正しき手段を以て進んだからで、彼が大紳士となつたのも、實は此矢探しの方法を應用したからである。

グ氏は十三歳で、イートン校へ入つて、七年間といふもの、此學

校にゐた。此學校は、彼の名高い、テームス河に沿うた一勝地で、物古りたる木立の、こんもりした森の中にある古風な建物、學ぶには極めて適當な處である。

此學校では、グ氏が尤も若かつたので、自然其無邪氣な話しが、今も残つてゐる。グ氏は、自分の部屋の壁へ、小刀で持つて、「グランドストーン」の九字を刻んだといふ事で、今も尙其鉛筆のあとが、かすかに讀まれるさうだ。

イートン校で、グ氏は、専ら、希臘羅典の古文辭地理書などを學んだが、此外に彼は數學をも勉強した。

其品行は、實に一點の申分もなく、上帝を信じ、同朋に親切であつばれ將來の大人物と見られた。

この學校に一種慘酷な風があつた。それはイートン祭日に家猪を

追ひ廻して、其苦しみ、泣き叫ぶのを見て喜ぶのだ。西洋はちろか、日本にもこの、動物をひどい目にあはせて、喜ぶといふ様な一種の野蠻な風がある。闘犬、闘鶏などを見て、手を叩き、杯を舉げて喜ぶ事などは、昔の蠻風だ。猛獸狩などは士氣を鼓舞するとか何とかいふ言譯もあるが、あの野山に歌ふ小禽を、ドン／＼撃つて喜ぶといふ遊戯などは、あまり士君子のすべき事ではない。

グ氏は、イートン校の、この風習を見て、大に嘆いた。思うて云はざるは勇氣なし、云うては行はしめざるべからず、グ氏は此蠻風を、口を極めて攻撃した。

處が、中々聞き入れない。一少年はグ氏の言を「何を生意氣ナ！」

と嘲つた。聞くよりグ氏は大に怒り、鐵拳を彼の少年に加へたと、

校にゐた。此學校は、彼の名高い、テムス河に沿うた一勝地で、物古りたる木立の、こんもりした森の中にある古風な建物、學ぶには極めて適當な處である。

此學校では、グ氏が尤も若かつたので、自然其無邪氣な話しが、今も残つてゐる。グ氏は、自分の部屋の壁へ、小刀で持つて、『グランドストーン』の九字を刻んだといふ事で、今も尙其鉛筆のあとが、かすかに讀まれるさうだ。

イートン校で、グ氏は、専ら、希臘羅典の古文辭地理書などを學んだが、此外に彼は數學をも勉強した。

其品行は、實に一點の申分もなく、上帝を信じ、同期に親切で、あつばれ將來の大人物と見られた。

この學校に一種慘酷な風があつた。それはイートン祭日に家猪を

追ひ廻して、其苦しみ、泣き叫ぶのを見て喜ぶのだ。西洋はあつか、日本にもこの、動物をひどい目にあはせて、喜ぶといふ様な一種の野蠻な風がある。闘犬、闘鶏などを見て、手を叩き、杯を舉げて喜ぶ事などは、昔の蠻風だ。猛獸狩などは士氣を鼓舞するとか何とかいふ言譯もあるが、あの野山に歌ふ小禽を、ドン／＼撃つて喜ぶといふ遊戯などは、あまり士君子のすべき事ではない。

グ氏は、イートン校の、この風習を見て、大に嘆いた。思うて云はざるは勇氣なし、云うては行はしめざるべからずで、グ氏は此蠻風を、口を極めて攻撃した。

處が、中々聞き入れない。一少年はグ氏の言を

「何を生意氣ナ！」

と嘲つた。聞くよりグ氏は大に怒り、鐵拳を彼の少年に加へたと、

ふ事だ。これが所謂慈悲あまりありて怒つたので、決して彼の蠻行ではない。野猪にそゝいだ涙は、この勇氣を引起したのであつた。

イートン校にある事四年、十七歳の時に、彼は處女演説をやつた。其問題は「貧民教育の利害」といふので、黄口の少年、其論旨は、極めて幼稚なるものであつたが、其辨論の調子、及其論の結構は、實に大人びたものであつた。彼の大英國の責任を双肩に負うて、大宰相として議會で論戰をした其出立點は、實に此學校の教室であつた。

此學校から雜誌が出た。其名をイートン雜誌と云つた。十七歳の時の演説家は、十カ才にして、此イートン誌の編輯人となつた。議論も書けば詩作もする。翻譯もすれば雜報もかく。といふ風で、一かどの少年文士となつた。殊に此時彼の作になつた、雄辨論の如き



クラッドストリン

は、實に快心の文字で、そぞろ彼が後來の大宰相の面影が窺はれる。又「今古英才の比較」といふ文字は、實に真卒なる名文であつた。グ氏は、此雜誌發行の後、間もなくイートン校を去つた。去つて行く處は何處、ケンブリッジと共に英國の二大學たる、オックスフォールド大學である。

その四 雨が降つても行く處までは行く！

日本の大學に、種々の分科がある如く、オックスフォールドにも數多の分科がある。將來の大政治家たらんとする、わがグ氏は、何科を撰んだかといふのが、大に趣味のある問題である。彼は、政治家の志望を以て、オックスフォールド大學の、神學科へ入學しようとした。周囲の人は驚いた。それは無理もない話だ。

そこで、其驚いた人の中の一人が、グ氏に向つて、

「君は、何を以て世に立たうとするのか？」

と問ふとグ氏は、

「僕は政治家となつて、世に立たうとするのだ！」

問うた人は眼を見張つて、

「政治家となるのに、神學科へ這入るのか？」

「左様！」

「それは一體、如何いふわけだ。今日政治家となつて居る人は、何れも皆法律を修めてゐるぢやないか。國會議員の大部分は、法科の出身ぢやないか！」

とたしなめる様にいふと、グ氏は、

「成程、大概の人はさう思つてる。君も左様思ふか。それは、君の

いふ通り、政治家の多くのものは、法律科出身である。が眞の大政治家となるには、まづ第一に、正義公道を踏み博愛の情を持つことだ。僕は今までいさゝか學問をしたから、この上は、正しい道を學んで、大政治家となるために、神學科へ入るのだ！」

と云つたとある。あゝ、此志あつて、眞の大政治家となる事が出来るのだ。國家の安危に任ずるの大偉人となる事が出来るのだ。此の如き考を以て、オックスフォードの神學科へ入學をしたグ氏は、せつせと學業を勉めて、その際には折々友人と共に散歩をしたが、散歩をするのが、少々風變りだ。

まづ初めに、今日は、何處まで行く、と定ると、たとへ其道で、如何な事にあつても、定めた處の距離まで行かざれば止まない。ある日の事、二三人の友人と共に、散歩に出かけた。もとより、

例の通り、初めに、何處まで行く、といふ事を定めて出掛けたのだが、さて途中まで来ると、今まで晴れてゐた空が、俄に曇つて来た。見る／＼中に一天墨を流した如く、ポツリ／＼と大粒の雨が降つて来た。風はゴ／＼と木の枝を鳴らして、今にも大暴れにならういふ光景だ。其頃の英國の大学生は、どんな時でも決して傘を持たないといふ風だつた。そこで、一人の友人が、

「オイ／＼。大變だ。もう歸らうよ。ポツ／＼来たぞ！」

といふと又一人が、

「風も中々烈しくなつた。引返さう。引返さう。さ、グ君、歸らう！」

といふ、グ氏は、一向平氣で

「成程、これは嵐だナ。暴れるかも知れん！」

『そんな呑気な事を云はないで、さ、歸らう、歸らう！』

と友人共は、グ氏を促して、引返さうとする。するとグ氏は

『諸君、僕に構はず歸つて呉れたまへ。僕は最初に定めた處まで行

かないさきには涙多に歸らないから！』

と更に歩きだした。友達共は、

『ヤレ、ヤレ、亦例の頑固か、それぢやお先へ失禮するよ！』

とスタ／＼歸つて行つた。

グ氏は、友人達に別れてたゞ一人、ブラ／＼歩いて最初に定めた

處の方へやつて來ると、思つた通り、大風大雨、おまけに雷鳴凄ま

じく、實に大魔王があるかと、思ふばかりの暴となつた。

ドツと降り來る強雨は、襟から肌へ傳はつて、身體をザ／＼洗つ

て落ちる。が、グ氏は、これを避けようともせず、泥の中をグチャ

／＼と、規律ある歩調で、到頭目的地まで行き、更に引返して、濡

鼠になつて歸つて來た。

先へ歸つた連中は、

『ヤ、グ氏が歸つた。物數奇だナ！』

と云つて笑つたが、グ氏は少しも頓着しない。自分は目的通りの事

を行つた、と愉快に思つて、平氣ですまして居る。

かれが堅忍不拔の思想は、あらゆる場合にあらはれてゐる。この

後オックスフォードで、古典數學二科の學を修め、優等で卒業して、

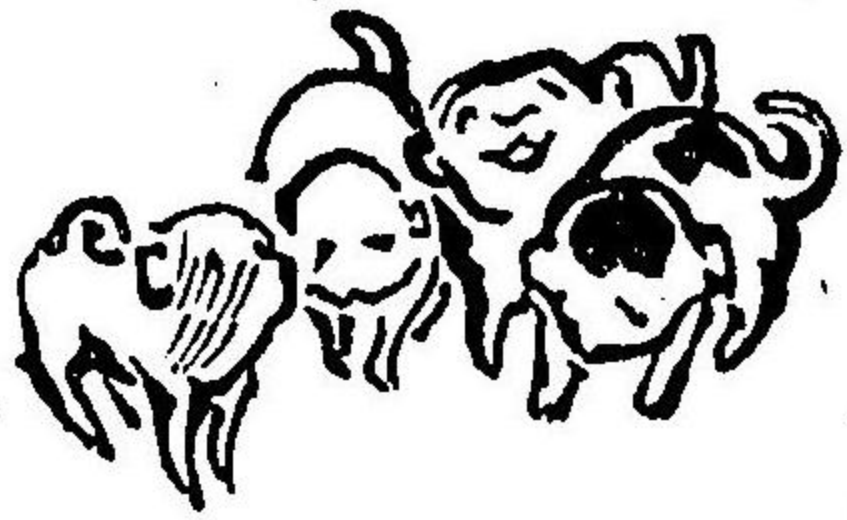
二つの學位を得たのも、實に其『目的を立てたら、必ず行く處まで

行く！』といふ思想の根底が確であつたからである。

かくの如くして、かれは二十三才の時に、大學を出た。この後は

かれの歴史中尤も花やかな舞台である。而して、此大偉人は、大手

腕を振つて、英國の爲めに、多大の忠節を盡くしたに不係授爵の君命を辭して、英國の一平民として、ウエストミンスターに長に眠つてゐるのだ。彼は十九世紀における世界中の政治家の中において、尤も高さ尤も清き人であつた。



汽車の 發明家 スチブソン

その一 昔と今

敏夫は、生れつき至つて活潑で、その上に記憶力が頗る能い。殊に、理科算術などが大の好で、先生から六ヶ敷問題などを出されても、少しもそれを面倒だと思はないで、その問題が分るまでは、考へに考へる。學校で分らなければ、歸つてから考へる。如何しても分らないとすると、一時チヨイと氣を變へて、五六町散歩して、そして歸つて又考へる。て、其問題が十分に分ると、彼はもうたゞ跳り上つて喜んで、翌日學校へ行つて先生に答辯をするといふのが、此上なき愉快げに見える。

丁度學校が暑中休暇になつたので、久しぶりに故郷へ歸つて、父様や母様の御機嫌が伺ひたいと、叔父様に願つて見ると、叔父様も心よく許して下さつて、さて打扮は極めて身輕、學校通ひの鞆を肩に掛けて、新橋停車場へ急いだ。

敏夫はもとより赤切符で、三等の急行車へ乗り込んだ。自分の向ふ側には、八字髯の洋服男がゐて、隣には六十餘りの爺さんが居る。一聲の汽笛で、汽車は新橋を出た。西に青々とした小山を見、左に鷗飛ぶ海をながめながら走る。敏夫は何となく愉快で溜らぬ。

敏夫の向側の洋服男は、まだ小さな敏夫がたゞ一人汽車に乗り込んでゐるので、これはこの頃大森あたりから東京へ通ふ學生だと思つたのか、

「あなたは、學校のお歸りですか？」と問うた。

敏夫も、人と話しをするのは好きな方であるから、

「否、僕は國へ歸るのです？」

「ハハア。お國へ。お國は、何處です？」

「ハイ、大阪の近在です！」

「ハア。大阪、それは一人で中々えらい！」

此時、隣りに居た爺さんは、

「便利になりましたなあ！」

とかの洋服男にいひながら、又敏夫に向つて、

「坊ちやんを一人、ツーツと大阪へ連れてつて呉れるのも、此汽車

のお蔭ですよ。わし等の若い時には、ヤレ駕籠だ、それ馬だ、箱根山だ、大井川だ、荒井の番所だ、なんて、面倒な處が澤山あつて、中々坊ちゃん位の子達が、東海道を一人旅するなんてことは出来ませんでしたよ。」
トにこゝ／＼笑ひながら、爺さん話し出す。
洋服男も、其話しを受けついて、

「眞實に開けたもんです。横濱と東京の間に汽車が出来た時などは、随分人々が不思議なものが出来たなんていひましたねえ。今の少年等は、生れながらにして汽車を見、汽船を見、電車を見、電信を知つてゐるから、別に何とも思はないでせうが、昔、駕籠屋に擔がれて旅行したり、大井河を運臺に乗つて渡つたりしたこと

を知つてゐる方は、僅に四十年ばかりの間に、旅をする工合が、から變つたのが、何となく不思議に思はれるてせうよ。」
と聞いて、かの爺さんは、

「眞實にさうですよ。昔は、江戸から伊勢參宮に行くといふと、品川あたりまで送つて行つて、まづ御機嫌よう、とそこで別れの盃なんかして、皆涙ながらに別れたものが、今は如何です、朝鮮や支那へ行くにも、隣家へ行くやうなもので、それも眞實陸には汽車、海には汽船があるお蔭ですよ。」

敏夫は面白くなつて来て、
「僕等は、幸福ですねえ！」
といふと、かの洋服男は、

「幸福ですとも、僅四十年の間に、凡ての文明が進歩して、世界一等國の今の日本に、生れ合した人は實に幸福ですよ。しかし、昔から一つの立派な發明をして、世界人類に、幸福を與へようとした其發明家なるものゝ苦心といふものは、實に大變なものですよ。かの英雄とか豪傑とか云はれる人々が、國を攻め城を破り、多くの兵を殺して自分の領分を増し、萬事自分が思ふまゝに振舞つて、さて死んで了つたそのあとで、あの人はえらい人だ、豪傑だ、英雄だ、と云つては見るものゝ別にどれだけの事を殘して置いたか、たゞその人の傳記を讀まして、後の世の人々を教訓するにとゞまつて、形にあらはれた績といふものは、まづ少いといはねばなりません。そこへ行くと、一つの器械を發明した人は、其人は死んでも、其人の作つたものは、後世に至つて、改良に改良を加へら

れ、多くの人々の便益を計るといふので、其人は死んでも、實は其人の智慧は生きて働いてゐるのです。この汽車の發明者、スチブンスンの智慧は、今世界中に生きて働いて居るのです！」

敏夫は

「スチブンスン、く。僕、知つてゐますよ、汽車の發明家……」

「そりや、名高い人ですもの、其名は誰れても、知つてゐませう。しかし、其人の幼時の苦心から、大きくなつて、さて汽車を發明する處まで委敷ことを知つてゐますか？」

敏夫は身を乗り出して、

「存じません。何卒話して下さいな。僕、そんな話を聞くのは大好きですから、ね、話して下さいな。」

その隣の爺さんも、

「私も聞きたい。無學の爺ぢやから、後學のためになりますよ。」
 「ハ、ハ、ハ、まあ、汽車の中のお慰みにお話しませう！」
 とかの洋服の人は、巻煙草に火を點じた。
 この時汽車は大磯を出て、見ても涼しき松林の中を走つて居るのである。

その二 代々の貧乏

今から丁度百二十四年前のお話しだが、英國の片田舎、ウエーラムといふ石炭坑の近處に、矢張ウエーラムといふ村があつた。此村は石炭坑があるために、細々と暮しをたてゝゐるといふ位の淋しい村で、其の炭坑と云つたところが、もとより現今の日本の三池などゝいふ様な、大仕掛のもてない。この村の外れに實にも粗末な一軒

の小屋がある。其小屋の主をロバートスチブソンと云つて、矢張これも炭坑の職工、しかも火夫といふ危い役を勤めて、さて其手間は幾何取れるといふと、英國の金で、一週間十二志、日本に直すと二圓六十錢ばかりだ。

今から、百數十年前の英國の事だから、今日の英國とは違ふであらうが、とにかく、一週二圓六十錢として見ると、今の日本の會社の職工より、安かつたといはねばならぬ。此手間は賃の少い職工には、一人の妻と、一人の子とがあつたが、その二番目の子が生れたのが、西曆千七百八十一年、六月九日の事だ。

いつも、煤の香ばかりする、寂れた村のホツタテ小屋の、破れかけた屋根の下に産聲を上げて、石炭臭い水で産湯をつかつた此貧兒は、やがては其智慧の光が、世界を照らして、凡ての人々が其蔭

て現にかうやつて、樂に話しながら數百里を一日で行くことが出来るといふ汽車の發明家、ジョージスチブソン其人であつたのだ。一週間、二圓六十錢、一ヶ月にして、十圓餘、一人暮しても随分骨が折れるのに、妻があり子が二人まであり、中々容易な事でない。しかも、もう子が出来なかつたかといふと、驚くぢやないか、まだ其下に四人も出来た。

一家は八人の暮し、僅に十圓の金で、如何して暮して行けよう。いくら稼いでも稼いでも、貧乏はますます甚しく、實に眼もあてられぬ有様で、日本ていへば、米の飯は勿論、お粥をすするも中々に六ヶしいといふ位、英國では堅い黒いパンも、三度が三度食べるといふ事は出来なう。

しかし、幸にして、此父と母とは、心から卑しい、貧乏人ではなかつたので、もとより學校へは通はず事は出来ないが其貧乏の苦しの中でも、夜などは子供を集めて、面白いお伽噺をしたり、又種々教訓の話しをしたりして、父母二人はこんな貧しい生活で世の中から下草の様に押へつけられて居るが、せめて子供等は、一人前にしたいと、色々苦心して育て居つた。

さて、この貧乏職工の小屋の前には、一筋の道が通じて居つて、毎日何度となく荷馬車が通ふ。これは近きウエーラムの炭坑で掘つた石炭を積込んで、船着場まで運んで行くのである。

子供の多いスチブソンの小屋の中からは、チヨコく走つて姉や弟が道の中央へ出て遊ぶ、そこへ馬車が来る。

『あつ、危し！』
と二番目のジョージは、いつも自分が兄さん株であるので、自分よ

下の子供の張番をしてゐる。これがまづ未來の大發明家の日々の役目であつた。

朝夕に、たゞ塵を立て、往復する荷馬車ばかりを見て暮して居た此子供は、八歳の時、父母に連れられて、ジウリー、ポルンといふ處へ移つた。こゝも相變らず、炭坑のある處で、父は同じく賤しい職工、貧乏は段々と甚しくなるばかりであつた。

スチブンスンが日々の楽しみは、土をこねて蒸汽機關の形をこしらへたり、又草の根や莖を取つて、種々の器械を作る事であつた。そして、幼い時には、誰れても物事に倦きるものだが、此貧兒は、慰みに一つの玩弄を作らう、とすると、一心不亂に朝から晩までやつて居つて、少しも倦かない。つまり、何事でも、必と遣り通す、といふ氣象が、幼い時から其芽を發して居つたので、それがやがて

大きくなつて、世界を蔽ふ大樹となつたのである。

その三 此世の地獄

天は此貧乏人の二男を、中々遊ばしてばかりは置かない。少しても役に立つ様になると、たとへ半日のパンの代でも稼がねばならぬ。スチブンスンは、その村の牧牛の家に雇はれた。六技術家の卵は、こゝに救童となつて、朝から晩まで、牛の世話をして、さて其賃金は、一日に四錢だ。

一ヶ月、一圓廿錢の俸給で、スチブンスンは、日々其職に勉強をして居る。金が少いから、怠けるの、金が多いから、勉強するの、といふ様な、汚れた根性は、此將來の大技術家にはもとよりあらう筈はない。

やがて、耕馬係となり、又燕膏を作る役となつて、賃金も以前より増されたが、暫時たつと、其家を止めて、今度は礦山の職工となつた。

初めは見習として、十二錢ばかり貰つたのが、やがて、十六錢餘となつた。

お日様の恵みの影もさゝぬ坑の内に、身にはボロ／＼の衣類を着け、靴はもう破れて了つて、買ふことが出来ないから、跣足のまゝ、ステップソンは、いはば此世の中の地獄ともいはれる坑掘人足として、朝夕油汗を流しながら暗黒世界に働くのであつた。

しかし、この暗の中にあつても、凡人ならぬステップソンの智慧の光りは、見る物觸る物を照らした。

凡て、少年の時より、何物に對しても、よく氣を注げて見るとい



汽車の發明

ふ事が必要なもので、眼に見るもの、耳に聞くもの、これをそれからそれと能く考へて見ると、澤山な機關が皆それ／＼備つて居る。

例之、こゝにワン／＼といふ。ワン／＼はもとより犬の鳴聲だが、其犬といふものは如何いふ形状で、其毛の色はどんなのがあつて、其種類何種あつて、その性質はどんなもので、さてまた昔からその犬について如何いふ面白いお話がある、とかう色々考へて見ても、一聲ワン、と鳴いた犬から、種々の事が胸に浮ぶ。ニヤンは猫、もうは牛、ヒンは馬、笑つてはいけない。動物が一聲の鳴聲も、われ／＼が一種の教科書といはれるので、まして、山川草木は勿論、空を行く雲、地に置く霜、流れる水、降る雨、其他、どんな物でも、それ／＼種々の變化があつて出来たもので、また此後、どれだけ變

つて行くか、分らぬものである。

これをポカンとして見て居れば、たゞもう見ただけのことと、電氣燈は明るいもの、氷は冷たいもの、火は暖いもの、鹽は辛いもの、といふだけに止まるが、さてその物に就て、種々考へて見ると、百千萬と數へられぬ程の、疑問が起つて来るものである。

坑の内／＼ごめいてゐた貧乏小僧は、何事も決してポカンとは見て居なかつた。十分注意もし、十分考へもして、さて日々勞役に従つて居た。

もとより、多くの坑夫の中に、此スチブソンが交つてゐるのは、炭の中に金剛石が交つてゐる様なもので、同じ炭素でも金剛石は玉冠を飾るもの、同じ人間でもスチブソンは、世界の偉人となる人である。だから、朋輩からも上役からも、眼をかけられて、十七歳

の時には、機關附の職工となつて、お父様よりは、偉くなつて了つた。

小さな時から、土で機械を造つて、唯一の樂みとして居つた小僧は、こゝに機關附の職工となつたのは、恰度猫に鯉節で、本人に取つて、これ以上の愉快はなかつた。だから、日々機關を扱ひながら、こゝの工合は能い、こゝは悪い。と實地に就いて、毎日研究をするので、少々の破損位は自分で直すし、其改良進歩は、日々に加へて行くといふ有様、もはやこゝで、其大發明家たるの基礎は定つたが、しかし、かなしい事には、此少年、小さな時から、大貧乏であつたために、學校へ行つてないから、本が讀めない、字が書けない。實地はやつて居つても、其理窟は分らない。大概の者なら

『なに、おれは實地ばかりでやつて見せる！』

と自分の學問の無いのを悟るより、却つて人の學問のあるのを妬んで、そこで一生を過るのだが、此子はそんな愚物ではないので、

『あゝ、わしには教育がない。残念なことだ！』
と、坑の内にあつても、機關の火の光りて、同じ仲間の坑夫に頼んで、新聞や雑誌などを讀んで貰つて居つたが、如何も、そんな事は、追つかないので、いよく夜學校へ通ふことにした。

この時スチブソンもはや十八歳、職工仲間でも一廉の男であつたが、愈、これより讀書習字算術、と、賃金を得た其多くは、授業料に拂つて、一心不亂に勉強した。

自分の賃金が上つたと云つても、此時一週十二志、即ち日本の金で、二圓六十錢ばかりであるから、さうく勉強もし、自分も暮し、

父や弟や妹の世話もするといふのは、それは中々六ヶしい。そこで暇々には、友人の破れ靴をつくつてやつて、それで僅の金をこしらへて、凡ての足にして居つた。もとより彼の心でも、あまり能い心持はしなかつたらうが、坑夫の靴をつづくつたかれの手は、やがて世界を掩ふ大なる手となつたのだ。

その三 留主中の火事

さても、スチブソンは、學問を勵み、職務に忠實で、機關に向つては、時々刻々其注意を怠らず、勤めてゐる中に追々に出世して、一ヶ月五十圓餘の賃金を得る様に成つた。そこで、其近處の田舎屋の下女をしてゐた、ファンネーといふ娘と婚禮をした。

この又ファンネーが、よく夫を助けて働いたが、二年目に子が出

来て、其名をロバートと名づけた。十年前は、黒パンも食べられなかつた大貧乏の小僧が、ニウカツスルのウエリントン、クエーといふ處にとにかく小さな小屋の中でも、妻を迎へ、子も出来た。

ある日の事、スチブソン一家内留守の時に、煙筒から火がポツポツと出たので、近處の人はこれを見附けて、

「火事だ！火事だ！」

といふので、寄つて集つて、水を煙筒の中へぶつかけて漸くのこととて消し止め、そのまゝ歸つて了つた。

何にも知らぬスチブソンは、歸つて来て見て、家に這入ると、こはそもいかに、道具は盡く眞黒々となつて、おまけに煙筒の中から、煤の水がだら／＼と床の上に落ちたので、何もかも滅茶／＼の大混雑。

『如何したのだらう？』
 とチツと見てゐると、兼てこんな貧乏世帯の家には、まづ第一の寶として、少しこゝには贅澤過ぎた柱時計が、床の上にバッタリ落ちて破れて居る。

機械好のスチブンスンは、他のものには眼をつけず、時計を取り上げて、前後から見てもたが、
 『時計屋へやらすに、おれが直してやらう！』
 と直ぐと、其時計の器械を、ばらばらに解いて了つて再びもとの通りに組むと、時計は、キチ／＼と善い音を出して、もとの通りに動きだした。

この噂を聞いて、多くの人から、時計直しを頼まれて、幾分の金を得たといふ事である。極めて小さな事のやうではあるが、彼が、器械に熱心なる事は、この一話で證せられる。

今まで、平和なる、スチブンスンの小屋に大變な事が出来上つた。よく働き、よく慰めて呉れた妻のファンネーは、最愛の夫と子とを残して、死んで了つた。未来の大技術家も、こゝ



『如何したのだらう？』

とチツと見てゐると、兼てこんな貧乏世帯の家には、まづ第一の寶として、少しこゝには贅澤過ぎた柱時計が、床の上にバッテリー落ちて破れて居る。

機械好のスチブンスンは、他のものには眼をつけず、時計を取り上げて、前後から見てもたが、

『時計屋へやらすに、おれが直してやらう！』

と直ぐと、其時計の器械を、ばらばらに解いて了つて再びもとの通りに組むと、時計は、キチキチと善い音を出して、もとの通りに動きだした。

この噂を聞いて、多くの人から、時計直しを頼まれて、幾分の金を得たといふ事である。極めて小さな事のやうではあるが、彼が、

器械に熱心なる事は、この一話で證せられる。

今まで、平和なる、スチブンスンの小屋に大變な事が出来上つた。よく働き、よく慰めて呉れた妻のファンネーは、最愛の夫と子とを残して、死んで了つた。未來の大技術家も、こゝ



で途方に呉れた。乳が欲しいと鳴く子を抱いて、流石のステブソンも大困りに困つた。

しかし、失望したとて、仕方がない。今は亡き妻の形見たる、此愛子ロバートを、立派なものに育て上げねばならぬ、と彼は決心した。併し、随分、ステブソンには、厄介者が多いのであるから、此子だけを十分に教育するといふわけには行かない。そこで、自分は坑内で、靴師、時計師の内職の外に、裁縫までやつて、その賃金を積んで置いて、愛子ロバートの學資に當てておいたので、ロバートを學校へやる事が出来た。ロバートも、父の志をよく胸に刻んで、日々夜々勉強を怠らず、習つて來た時には、歸つて、父に一々告げるので、もとよりあまり學問のないステブソンは、これを快く聞いて、父子二人は楽しく日をおくつて居た。

さて、ステブソンは、汽關に向つて、益々研究をしようと思つて、其子のある女に預けて置いて、其炭坑を辭し、モントロース紡績處へ職工に住み込んだ。この時、この紡績處では、ワットやボルトンの蒸汽機關を備へて居つたのであつた。ワットはもとより誰れも知る、蒸汽力の發見者、かの鐵瓶の蓋の持ち上りから、考へ附いて、蒸汽の力は、よく凡ての物體を動かすといふ事を、發見をした大人物である。

この紡績處で、ステブソンは、一年餘り職工となつて、働ながら、研究をして居る中に、三十磅日本の三百圓程の金が出来たが、こゝに又不幸な事が持上つた。

といふのは外の事でない。父が坑内にあつて、大怪我をしてとう／＼盲目となつたのである。孝心なステブソンは、此報を聞いて

直ちに歸つて見ると、眼もあてられぬ様な有様、子は澤山にあるし、肝心の父は盲目、母の手一つで何と仕様がなないのである。

一ケ年の苦心の末、漸く貯管た三百圓は、そつくり其處へ出して、了つた、それは借金に取られて了つて、自分も父も母も、子も、一文なしの身となつて了つた。

さてこれからは、又大に働かねばならぬ、とスチブソンは思ったが、丁度其時は、世間は大變不景氣であつた。といふのは英國が今の亞米利加合衆國に敗けた時で、税は重くなる、商賣は振はない。自然會社でも職人を減すといふ場合であつたから、身に一文の貯もなきスチブソンは、此有様を見て、流石少しは困つた。

一體、一つ困つた事が出来て來ると、その爲めに、却つて勇氣を出すのは、スチブソンの性質であるが、重ねくの此不幸に、彼

は少しは失望したのも、神様でない以上は道理である。

そこで考へた。

『米國へ行かう！』

と、其妹が夫と共に米國にゐるので、一つはその心を堅めたものらしい、が、行けなかつた。いくら、スチブソンでも、一文なしでは米國へは行けない。かれは旅費の出處がないので、ほと／＼困つた。

此旅費の缺乏は、彼に取つて、却つて大なる幸福であつた。英國もまた大なる幸福であつた。彼は遂に英國が誇りとすべき汽車の大發明を、英國の地で完うすることが出来たのだ。

此の如くして、彼は發明界の偉人、否、世界の偉人となつたんだ。こゝまで話した洋服男は、ハタと口を閉ぢた。敏夫は感慨に堪へ

ぬ顔をして肩をいからした。爺さんもじきりと感心をして、首をふつてゐる。汽車は静岡に着いた。



長距離 競走中 獅子との格闘

(南阿トランスヴァール大統領
クリューゲルの少年時代)

一 競走中の寄道

暗黒世界と名に高き、阿弗利加の南部、カレドン河のほとりへ、流轉て來た遊牧民の子に、一人の勇少年があつた、阿弗利加といふと、われ／＼はすぐと砂漠、獅子、虎、大蛇、鱷魚などを聯想する。木は空にかぶさつて、日光も通らず、雨露はしと／＼と土を濕して、毒蟲がそこに氾々としてゐる光景が眼に浮ぶ。

この厭な、薄暗い、じめ／＼した南阿の地に、天幕をかつぎながら、水草を追うて轉移する遊牧民の子は、獅子や虎や大蛇を、何ぞ

も思はなかつた。のみならず、彼等を征服するに、非常な威力を持つて居つた。

この勇少年が獅子や野牛と戦つた話しは、今も其土地の人々が忘られぬお伽噺である。一度叫べば百獣聲をひそめるといふ大獅子もこの小僧に撃殺されたことが夥しい。其片々たる武勇談の中に、彼が最も勇氣をあらはしたといふ、派手な一場のお物語がある。

ある時の事、此勇少年は、四五人の友人と共に、競走をする事となつた。立合人は、會長で、勝てば大した恩賞がある。

さて其競走が、極めて長距離で、しかも其途中には、山もある、畠もある、田もある、川もある。晝尚暗き森もあれば、人の通はぬ谷もある。

まづ目的地に目標を定めておいて、いよいよ起點から出立するこ

と、した。

『一、二、三ッ』

と云つたか云はぬか、とにかく何かの合圖で走り出した。

勇少年は、兼てより走る事には馴れて居る。敢て急がず、それで極めて早い。同輩は、初めの中は元氣は能いが、それが長くは續かない。

勇少年は、たゞ一人、眞先に疾走して、願願つて見ると、誰も從いて來ない。

『オ、大分に走つた、誰もまだ來やしない。父様の家へ寄つて行かう！』

といひながら、又走りつゞけて、其途中にある父の家へ立寄つた。この子の親も、極めて勇氣の人で、わが子の這入つて來るのを見



ると、

「オ、今日も、また競走かい？」

「ハイ、父様、咖啡を一杯下さいな！」

「よし、よし、呑んで行け！」

と呑氣なもので、こゝで咖啡をすゝり初める。父は、

わが子の風體を見ると、山野森林を行く此邊の人々は、必ず持つてゐる武器を持つてゐない。南阿の山野を走るに身に寸鐵を帯びないといふ事は極め

て險呑な

ことだ。

『不用心

な奴だ

ナ！』

と父は頗

る怒つた

が、何が

さて今競

走中のわ

が子であ

るから、

長距離競走中獅子との格闘



こゝで叱り飛ばすのも、折が

悪いと、氣をしづめて、

「オイ、これを持つて行け、

危いから！」

といふので、一挺の小銃を取

り出して、手渡し

た。

勇少年は心づい

て、

「ありがたう。僕は氣がつかなかっ

た！」

「早く行け！」

「ハイ、お土産を澤山持つて歸りますよ！」
と口早に云つて、小銃小脇に父の家を飛び出した。

二 獅子一吼

「少しおくれた、急がう！」

と、勇少年は又疾りつゞけたが、行方を見ても誰も走つてゐるものはない。

「如何したのか？」

と後方を見ると、三四人の友人共は、早息もたえくくに、走つては来るが、其體裁は實にあはれなものだ。

初め、出かける時の打扮は、或は刀や鎗を持ち、或は棍棒などを携へ、首に飾りをし、腕にも飾りをし、道行く人は、あれくくと、

指して見おくる様な、あつぱれ勇ましき武者振であつたのが、今はもう疲れ果て、持つたる武器や頸や腕の飾りも、荷厄介になつたから、皆これを地びたへ捨て、了つて、眞實の丸腰になつて、せつせと走つてゐる。走つてはゐるが、中々、彼の勇少年には及びつかない。首傾けて汗ダラ／＼、ハツ／＼と息を吐いて、實に見苦しい。勇少年は悠然と、矢張先登に走つて来たが、日は暮れかけて、野にも山にも夕靄たてこめ、茜色の雲は森影の薄黒き水にうつりてあたりは極めて静かだ。

見れば、誰も追つついて来ない。人通りもない。もう大丈夫だ。「勝つたぞ、勝つたぞ。何かお土産に持つて歸りたいものだが？」と勇少年は野心を起した。お土産といふのは、お菓子でもお煎餅でもない。幸、父に貰つた小銃で、覺えの腕をあらはして、旨さうな

獸を射取つて歸りたいといふのである。

向ふに見える小高い丘、こんもりとそこには草が茂つてゐる。其草叢を窺として、眠つてゐるのは、たしかに鹿の様だ。

「能い得物がある、鹿だ！、鹿だ！」

と勇少年は喜び勇んで、持つたる小銃狙ひを定めて、鹿に向つて引金を引いた。

が、轟然一發とは行かない。カチリと引金の音ばかり。

「あら、如何したのか？」

と勇少年は、小銃を調べようとするこの時、眠れる獸はムクリと起きて、キツと此方を睨んだのを見ると……驚いた。

眠れる鹿と思つたのは、これは大なる目違ひで、獸の王の大獅子が、目覺めたのである。

「あつ」

と云つたが、もうおそい。競走はまづあと廻しにして、勇少年は此獸王と戦はねばならぬ。お土産處の話してない。

しかし、獅子には馴れてゐる。彼は獅子に對して、直立不動の姿勢を取つて、突立つた。獅子は、のそりくと近づいて、勇少年を睨んで立つた。

向ふも動かず、此方も動かない。暫時すると二三歩獅子は退いた勇少年も同じくトツくと退く。すると、獅子は又二三歩進む。勇少年もまた進む。命のとりやり、九死の場合に、双方行きつ戻りつ魂比べてある。

暫時は、この無言の行をつゞけて居たが、如何に勇少年と雖、身體は綿の如く疲れた、太陽は早西山に入つて、残る光りは、獅子の

両眼に輝いた。

勇少年はこの時、手早く銃口を獅子に向けて、ガツチリ一発放つたが、前の如く矢張失敗、カチリと引金の



音ばかり。獅子は猛り立つた。地ひびきして彼は勇少年が立てる小丘の上へに跳り上つて来た。猛獣の腹に葬らるべき運命は近づいた。實に命は風前の燈である。今はもうこれ

までとある。鋭き爪に八裂にせられんまでも、と勇少年は小銃を高くあげて、これが所謂大上段、

「さあ、来い来れ！」と待ちかまへた。

見上げる獸王、見下す少年、天地にコトとの音もない。

今や飛びかゝらんと體をすくめて、遁ひよる獅子は、如何したとか十歩ばかりトツトツと退いた。

三 先登第一

「はて、變だナ！」

と勇少年は、尙も油断をせず、破鐵砲をふりあげながら、睨みつけてゐると、その威勢におそれたのか、それとも魂まけをしたのか

獅子は一聲、ウオー、と哮へて、彼方の森の木影をさして、ドン／＼走つて行つた。

ホツと一息ついた勇少年、危き處を漸く免がれて、命冥加の程を喜び、さて今までは何事も、忘れて居たが、自分は競走の最中である。

「もうだめだらう！」

と思つたが、

「走れるだけは、走つて見よう！」

とわれとわが心を勵まし、疲れたる身を起して、又もドン／＼走り出した。今や獅子の口より命を拾つて、漸く人心地になつた身が、更に其競走をつゞける意志の強さ。これがこの勇少年が將來に成功した所以である。

だめだ、と思つた競走は、外の人間がだめてあつたのだ。途中における大危難から免れた勇少年が、立派に先登第一着の名譽を博した。

會長は、勇少年に、第一着の賞を與へた。勇少年は心から神に感謝して、得々として我が家に歸つたとある。

諸君、此勇少年を誰とか爲す。其初め移住民の中にあつて、父と共に、羊牛を使役し、今日は向ふの森、明日は、此方の林、野となく山となく、天幕を持ち廻つて、ある時は野牛と格闘し、ある時は獅子の足下に踏まれ、あらゆる危険の中を犯して、蠻族の中に人となつた此勇少年は、後に至つて、南アトランスヴァールの大統領クリューゲルとなつたのである。

クリューゲルは、殆んど文明の何たるを知らずに成長した蠻民の

頭である。學問とか、文字とかに、少しも關係のなかつた大古の民
同様の人であつた。しかし、多くの望を屬せられて、一國の主權者
となり、その不完全なる戰術、不完全なる武器を以て、精銳比びな
き英國の大軍に抗し、よしや、最後には矢つき刀をれて降服はして
も、猛將クリューゲルの雷名を歐洲文明國民の間に轟かしたのは、
實に彼が獅子に對する時の如き勇氣から生れたのである。

クリューゲルは文明の紳士としては、極めて缺點の多い人であつ
た。併し一匹の小蛇にさへ、恐れ走る弱蟲に向つては、彼の少年時
代は恰好の興奮劑である。近世の一人傑である事は勿論である。

附錄 僕等の講演會

附 録 僕等の講演會

今日は何だか日が暮れるのが待ち遠しくてならぬ。今晚は先生のお宅に僕等同窓の茶話會があるのだ。

僕等が高等一年から、御厄介になつた日野先生のお宅は、今では僕等にとつて、實に此上もない安樂境である。一週間に一度は必ず先生を訪うて、種々のお話しをする。先生も快く話して下さる。これが僕等が何よりの楽しみだ。

今晚は、月に一回の茶話會の日だ。集まるもの先生を加へて七八人だが、皆々仲の善いお友達だから、定めて愉快な話しに一晚を楽しく暮すことだらう。

日が暮れた。僕は父様と母様とにお暇を頂いて先生のお宅へ出掛けて行つた。奥の十畳に、早、仁田美濃などの二三人が来てゐる。先生はいつもニコくと、

「ヤア、市橋君ですか！」

とお友達の様子に云つて下さる。僕はたゞもう嬉しくて溜らない。

「先生、今晚は！」

とお辭儀をすると、仁田君が

「市橋君、いつでもイの一番に来る君が、今日は少しおくれたナ！」

と笑ひながらいふから、僕は、

「考へながら、道を歩いてたから！」

「何を、君考へてたんだ？」

「面白い事を話さうと思つて！」



僕等の講演會

と笑つてゐる。其中に四五人の友達が来る。座が賑になる。此時先生は皆に向つて

「諸君、今晚はよくお出下すつた。さて今晚は、一つ談話會を開かうと思ひます。それも、歴史中の人物、特に偉人の少年時代について、各自が話したいと思ひます！」
と仰しやると、皆々顔見合せて、愉快らしく點頭さ合ふ。先生は言を次いで、

「で、其偉人傳を、雪月花の三に分けて話して見たいと思ひます。あなたがち一人の傳記を委敷いふに及ばん。偉人の傳記、可成は其少年時代の事を、此天然の三つの物から聯想して、お話しをして貰ひたいのです。そこで、こゝに人数が八人居るが、此中抽籤で、三人を定めませう！」

といふので、籤を取ると、第一の雪は、かういふ僕にあつた。第二の月は、美濃君で、第三の花が先生だ。そこで、僕はいよく先生登第一の講演者として、これから、雪より聯想したる偉人の傳記を話すことゝなつた。

◎雪

第一の口演者、市橋君は立上つた。彼は雪に關して、これから偉人の少年時代を説かうとするのだ。彼は小學校にゐた時分から中々の雄辯で、卒業式などの答辭は立派なものだつた。こゝに親友として僕は彼の口吻を記することゝしよう。(仁田生記)

▲アルプスの雪

諸君、僕は今日、先生のお宅へ来る少し前に、遙かに西方に聳ゆる雪の富士山を仰ぎました、世界に誇るべき日本の靈山たる此山は實にいつ見ても、胸がスク様で、心持が能う御座います。

日本國本島中で、一番高い處にある雪は、富士山頂の雪である事は申迄もありません。此雪を見上げた僕は、さて世界第一の高い處にある雪は、何處の雪だらうと考へつきました。これは取りも直さず、西藏と印度との境界にある、世界第一の高山たる、ヒマラヤ山中のユバレスト峯の頂にある雪で御座いませう。さて、それからそれと種々考へがついて、北亞米利加では、ロッキー山、亞細亞の北方では、崑崙山、と數へて行くと、歐羅巴では、伊太利亞とスキツル

との間にあるアルプス山、これは歐洲第一の高山で、しかも其山に積る皚々たる雪の中には、多くの勇壯な話しや、又悲惨なる話しが澤山残つて居ります。

まづ其勇壯な話しといふのは、此千丈の雪を厥ちらして、大軍をすゝめたといふ、二大豪傑の話してあります。二大豪傑とは誰ぞ、これを大昔にして、ハンニバル將軍、これを近世にして、かの第一世ナポレオンであります。

ハンニバル將軍は、カルターゴといふ處の人で、父をハミルカルと云つたのです。父も非常の英雄でしたが、其子のハンニバルは、實に伊のシーザー、佛のナポレオンにも劣らない大英雄でありました。

その英雄が、大軍を率ゐて、伊太利征伐をする時に、此アルプス

山を超えたのです。何がさて、高い處は二萬尺に近く、低い處でも一萬尺を下らないといふアルプス山、それから峯から峯、谷から谷と、數百里と連続する大山脈、夏てさへ身中も永る其峻山を、霜氷る嚴冬に、大軍を以て超えたのです。しかも向ふ處は盡く敵地、其敵の暴民が、日比馴れたるアルプスの險によつて、此遠來の敵を迎へ撃つちやありませんか。まづ其寒氣と、俄とに戦つて、さて更に其敵と戦はねばならぬ。こゝに至つて、人力を以ては、到底其目的を遂行することは出来ませんでした。

しかし、ハンニバルも人間です。が、人間の中では、殆んど勇氣と思慮とに満たされたる、まづ神に近い人間といはねばなりません。

二



偉人の講演會

見上ぐれば灰色に黒ずんだ其空から、**巴**と降りしきる雪、見下せば萬丈の谷は盡く氷の海となつて、草木は死し、鳥獸も影をひそめる其中を、ハンニバルは馬上ゆたかにしとくと超えて行くと、此深山幽谷を家となしたる、人か猿か分らない、半獸半人の暴民共が、何處から出たか、バラくと、雪山の半腹へ顯はれた。少しも騒がずハンニバルは、

『それ、射よ！』

といふので、弓を以て射倒すと、スグと、パツと何處かへ散るが、さて其早い事、早い事、何處を如何して逃げるのか、雪の中でもくゐるのか、實に電光石火とは此事であります。

少し進軍すると、又行方にあらはれる。それツ、といふので射ると、すぐと逃げる。來る時も脱兎の如く、行く時も脱兎の如しだ。

さらでだに困難なる雪中のアルプス越、かうのべつに暴民の障害に逢つては、第一、軍の意氣が衰るといふので、ハンニバルは盡の行軍をやめて、夜に入りて進む事としました。

處が、何分數萬の大軍の事、一夜の中に一つの峯を越え切らない中に夜が明ける。するとのごとくと暴民があらはれて、これを見るよりいひ合した様に山頂に登り、何百貫もあらういふ大石を、山の上からドーンと轉ばす。

グワラくくと百雷の、一時に落ちる様な響が、千山萬岳にひいて、大石が、登つて行かうとする軍兵の頭から、ドーンと落ちる。あはれ此下に布かれて、雪中に恨みの血を流すもの幾百幾千といふ事を知らず。しかもハンニバルは、勇氣少しも衰へず、九日目にとらくアルプスの頂上へ達し、遙かに羅馬を望んで、意氣天を吞む

といふ勢でございしました。それから首尾よくアルプスを下つて、羅馬の軍と戦ひ、大捷を博したので御座いますが、この時ハンニバルが越えたのは、セントベルナルドであつたといふことです。アルプス山は長い山脈ですから、其中にも色々名前が別れて居るのです。

三

諸君は、ハンニバルの勇氣を、何と思召しますか。この英雄がこゝを越してより、その後二千年、こゝに大那翁が此雪越をやつたのです。不能の二字は愚人の辭書にある處なり、何ぞわれを妨ぐるアルプス山あらんやとは、アルプスの峻嶺を仰いで、ナポレオンが叫んだ勇ましき言です。しかし、此時代には、既に其雪中に處する準備の方法も進んで居りましたらうし、軍隊の組織も、正しく整つて

居つたてせうから、ハンニバルに比しては、ナポレオンのアルプス越は、大に樂であつたらうと思ひます。英雄よく英雄を知ると、ナポレオンがアルプスを超えた時、彼は往昔のハンニバルの事を思つて、この様な意味な語をいひました。

「ハンニバルの様な、壯快な遠大な計畫は、人間がまだ昔からしたことがない。其計畫は實に秩序が正しかつた。」

と、かれナポレオンは、其アルプス越においても、又他の行動においても、實に近世のハンニバルといふべき人です。

さて、古英雄が、アルプスの雪を蹶散らした事は、略申しました。これは前にも申した壯快なる話といふ部分に屬するので、さてその次にいともあはれな、そして優しいお話しが、かのハンニバルの超えたと云ひ傳へられるセントベルナルドに残つて居ります。セン

トベルナルドの雪の中には、往昔から、實に多くの話材が埋もつて居るので御座います。

四

この、アルプス山は、唯今申した様に、冬になればとても越えな
い山ですが、中には餘儀ない事があつて、一番越してやらう、とい
ふ、小ハンニバルがあるのです。處が氣だけはあつても、何分前も
申した雪又雪、おまけに折々雪なだれといふものが、ドーツとやつ
て来て、あつといふ間もあらばこそ、雪の中に埋もれて了ふ人が隨
分あります。此様なあはれな最後をする人を、救けようといふ奇特
な坊さん達が、セントベルナルドの寺に居りました。

如何いふ工合にして助けるかといふと、犬を使ふのです。

まづ犬は二頭が一組となつて、その犬の頭には、一頭には濡い上
衣を結びつけ、軟かて滋養のある食物と、アルコールを充たした一
つの壺とを大きな籠に入れて、これを結びつけ、そして、出してや
るのです。犬は心得て、向ふの山、こなたの谷、雪の中をくゞりく
ぐりて、彼方でクンク、此方でクンク、鼻ヒコツカせて嗅ぎ廻
り、もし人の氣色を嗅ぎ出すと、其人の身體へまとひつくのです。
そこで其人が、如何やら斯うやら歩けると、先へ立つて案内をし
ます。助けられた人も、犬が物知顔に先へ立つて行くから、これは
何處か近處に、家でもあるだらうといふので、隨いて行く。又凍え
て半分氣を失なつてゐる人でも、犬に吠へられて、少々氣がつき、
頭にかけたるアルコールを呑み、軟い滋養物を食べ、濡い上衣をさ
て、こゝで漸く人心地がつくと、そこですぐと犬は案内役になるの

です。

モ一ツ悪く行つて、いくら吠えても氣のつかない人は、すぐと走り歸つて、坊さん達に知らせます、すると坊さんは飛んで来て出来るだけの介抱をするといふ都合です。

この悲深い坊さん達に使はれてゐる犬の中に、パリーといふ犬は、實に其犬中の賢なるもので、前後四十二人の命を助けたといふ事です。アルプス山の雪と共に此靈犬パリーの功蹟は、實に高きが上にも高いのであります。

あゝ、何たる優しい坊さん達、又やさしい犬共でせう。かゝる話しは外國によりないでせうか、否、日本にもあります。實に割符を合した様に、同じ話しがあります。しかも雪中から助けられた其人は、後に至つて高德比びなき聖人となつた少年です。私はアルプス

の雪から、飛んで日本の雪中の美談にうつります。

▲比叡の雪

一

諸君、諸君は、近江の國に比叡山といふ山があるのを御承知でせう。此山は、天台宗の本山で、その昔、傳教大師が、支那へ渡り、かの國の天台山をうつし、七堂伽藍を建てたる、わが國無比の靈山で御座います。淨土の開山たる法然上人も、一向宗の開山たる親鸞上人も、此山に登つて修業をしたのです。法華宗の高祖たる、日蓮上人も、此山に登つて、千萬卷の經典を読みくだき、遂に一天四海皆歸妙法といふ法華宗の一派を開いたのです。

さてこの比叡山は、もとより其高さに於て、前申すアルプス山に

及ぶべくもありませんが、しかし冬になると其雪の深いことは凄まじいものです。伊勢物語といふ本にも、「比叡の山は雲いと高し」とありまして、冬期にあつて、この山越は、中々の難處であります。今から三百年程前、ふり積む比叡の雪をわけて、故郷たる江州高島郡小河の里へ急ぐ藤太郎といふ一人の少年がありました。

この藤太郎は、伊豫國大洲からやつて来たのです。今てこそ海陸の便が開けて居るから、伊豫からはあるか、九州からでも、直ぐと来られますが、まだ交通の極めて不便であつた當時に、しかも寒空に少年の一人旅、定めし心細かつた事とせう。

しかし、藤太郎は母を思ふの一心で、この長旅をつゞけたのです。母が輝に悩んで居られると聞いて、子供心に大に心配して、ある武士から其輝の妙薬を貰ひうけ、それを持つて、遙々と歸國したので



僕等の講演會

す。

この山一つ越せば、故郷の小河、雪ふらばふれ、風吹かば吹け、今一辛抱だ、と藤太郎は、小さな足で雪を踏み占め、セツセと登つて来ました。

ドツと吹き来る寒風に、雪はふき卷上られて、一間先も分りませぬ。されと心を勵まして、進みに進んだが、草鞋は切れる腹は空る、足の先も手の先も、覚えぬ様に氷つて来る。眼の先がボンヤリして、何だか唐草の様なもの、キラ／＼／＼と光つたかと思ふと、氣は遠く、身體は地の下へ吸ひ込まれる様で、そこへバツタリ打倒れたまゝ、氣を失つて了ひました。

二

處が、この邊の辻堂に、一人の堂守の坊さんが住んで居つて、そこに一頭の黒犬が飼つてあります。これが前に申したセントベルナルド寺の小さな仕掛の様なもので、この黒犬は日本製の靈犬バリリです。

今日しも日課の様に、黒犬は雪の中を、あちこち歩いて居ると、一人の少年が倒れて居る。もとよりベルナルド式に救助の用意はないから、直ちに走せ歸つて、坊さんに此事を知らせました。

合圖に坊さんは、すぐと犬と案内として、来て居ると、以前の仕儀、即ち藤太郎を擔いで辻堂へ歸り、焚火をしてあたゝめ、種々介抱に手を盡すと、天未だ將來の聖人を捨てず、藤太郎は、ふと息をふき返しました。

「オ、氣がついたか、子供衆！」

と喜ぶ坊さんの顔を、藤太郎は見上げて、さては前刻雪の中で、一端死んだのを助けてくれたのかと、

「叔父さん、有難う存じます！」

と厚くお禮を申し、さて

「私は急ぎますから！」

と行方とするのを坊さんは、

「ま、も少しして暖つて居るがよい！」

といふ坊さんの親切を、

「ハイ、有難う存じますが、私の里は、もうつい其處で御座いますから！」

から！」

「さうかい、それぢや此犬を案内者として連れて行きなさい！」

と、こゝで犬を借用して、さて長く留主にしたわが故郷、小河の里

へ歸つて來ました。此時雪はまだ止まず、野も山も川も、皆一面に

冷き白衣で掩はれて、人通りもありません。

三

急ぎ足てわが家近く参つた藤太郎、ふと見ると、背戸の井戸に、

水を酌んでゐられるのは、絶えて久しくお目にかゝらぬ、懐かしの

母さんです。

「母様！」

と藤太郎は、不意に近づくと母親は、ふりむき様。

「オ、藤太郎！」

といふ聲を呑んで、

「藤太郎、お前は何の爲めに歸つて來ました？」

と實に不機嫌の様子、藤太郎は兼て母親から、學問の修業がつんで、一かどの學者にならねば、決して歸國をしてはならぬ、と命令されてゐるから、此時、返答の言も濁つて、

「ハイ、まだ學者にもならぬに、歸つたのは悪う御座いますが、母様、あなたは此頃輝に、大層お困りの様に承りましたので、私は心配てなりませんから、人様に願つて輝の妙薬を頂き、それを持つて歸つて參つたので御座います！」

といふのを聞いた母親は、海山越えて此寒空に、わざわざ薬を持つて歸つたわが子の優しさ、抱き入れて火にあたらせ、暖きもの煮て食べさせたい、と思ふ心は一ぱいだが、わざと心を鬼にして、

「まだ、修業のつまぬわが子に、此母は逢ひませぬ！」

といふなり、内へ這入らうとする。藤太郎は思はず、

「母様、御免下さい！」

とそこへ泣き倒れました。

母親の胸も張裂ける様です。やゝあつて藤太郎は、涙ながらに

「母様、それでは何卒此お薬だけ。」

と垣越しに、差出す薬を母親は、受取つて、

「これは貰つて置きます。一寸お待ちよ。」

といひつゝ、内に這入り、手早く一包の金を持つて来て、

「さあ藤太郎、このお金を路用として、早く大洲へお歸りよ！」

と渡すのを、藤太郎は押し戻して、

「母様、私は路用位は持つてをります。何卒此お金で下女でも雇つて少し樂をして下さいませ！」

母親は耳にもかけず、無理に取らして心強くも、家内へ這入つて了

ひました。

四

たとへわが身の爲を思つてくれるにしても、兎に角百里の道を遠しとせず、少年の身でエンヤラヤツと歸つて来たのに、あまりひどい扱ひだと、普通の子供なら恨むかも知れませんが、藤太郎は、其の薬を母の手へ渡せば、それで自分の目的は達したので、たゞ懐かしみの母の傍に、一時も居られぬかなしみは、これは是非なき事、母が前々からの命令もあるから、と諦めて、

「母様、御機嫌よろしう！」

とふりかへりく、トボク歸つて行く。又も降り来る雪は、小さな足あとを直ぐと填めて……あ、實に寒い寒い日で御座いました。

血を吐く様な苦しい思ひで、歸したもの、母親は、小さな我子の後姿をのび上りく見て居りましたが、それもやがて降りしきる雪に隔てられて見えなくなりました。母親は此時思はずわつと泣き倒れたので御座います。

其後藤太郎は、道中何の障りもなく、伊豫國大洲へ歸り、京都から来て居つた僧侶に就て、論語の講釋を聞き、大に發明する處がありました。たゞ一篇の論語、苟しくもいさゝか文學を知つて居るものは、讀まない人は無いでせうが、再三熟讀してこれを行ふといふ事は六ヶ敷もので御座います。所謂論語讀みの論語知らずといふものが、まづ百人の中九十五六人もあります。藤太郎は論語を讀んで、よく其論語を知つた人で御座いました。其後益奮勵した結果、自分の説と王陽明の説とが符合してゐるので、陽明學を研究すること、

なつて、遂に一代の碩徳となり、姓を中江名を與右衛門、藤樹と號し、世に所謂近江聖人と仰がれたのは、此藤太郎のこととて御座います。

諸君、長らくの間御清聴を煩はしました。尙、雪に就いては、赤穂義士、常盤御前、など、歴史上の話は澤山御座います。これにて御免を被つて、次は皎々たる月から聯想したる快談を、美濃君から承ることゝ致します。

◎月

今度は美濃君の番だ。尤も趣味深き月といふ題によつて語らるゝのだ。美濃君はもう一かどの青年である。如何なる快談がこれの舌頭をついていつる。さあ聽物だ。(市橋生記)

諸君、私には柄にも無い風流なる、月といふ題が當つたので御座います。雪と花、それは兩方とも如何にも優しいものですが、いづれもそれに近づく人でなければ、其美を感じるといふわけには参りません。處が僕の題、否僕が課せられたる題の此月は、千里隅なく照らす其の下には、誰れも彼れも美しくしき光の恵を浴びることが出来ず。雪には苦しむ人が多う御座います。花には踊る人が多う御座います。しかし、月には其中間で。随分月に向つて泣く人はあります。それが、それは月その物直接に愁を感じるのではないので、つまり何事か思ひ出して、即ち聯想して悲しむので、百人一音の中にも、亦其他種々の歌にもさういふ歌はコテと御座います。そこで又喜ぶ

方の人でも、お月様の下であまり跳り狂ふ様な人は少う御座います。あるかは知りませんが、花の下よりは少なう御座います。まづ静かに天空を仰いで、其皎々たる光を心持よく拜するので御座います。月といつても春夏秋冬と四期の月があります。が、今日まで、單に月といへば、まづ重に秋の月の事を申します。秋の月、特に陰曆八月十五夜の月は、名月とも最中の月とも、三五の月とも、望月とも、イヤハヤ種々の名がございます。

さて、其月、殊に秋の月に對して、私が歴史中の人物で思ひ合しますのは、まづ、上杉謙信で御座います。

私が、上杉謙信を、何故思ひ出しますかといふと、これは彼の有名なる詩から御座います。今更事新らしく申造もありませんが、彼の

霜滿陣營秋氣清。數行過雁月三更。

越山得并能州景。遮莫家鄉憶遠征。

の詩で御座います。古來、我國では、随分豪傑も澤山ありました。しかし、一度陣頭に臨んでは、鬼神をも恐れしめ、退いて、陣營に歸れば、今までの修羅場を忘れて了つて、光風霽月、吟懐を恣にした謙信の如きは、實に其人格に於て、尤も敬すべく、尤も慕ふべき大將であつたと思ひます。不幸にして天此好漢に年を假さず、中央日本に濶歩して天下に號令するには至りませんでした。此人をして若し長齡を保たしめたなら、果して信長秀吉をして、彼の如き成功を致さしめたてせうか。随つて、徳川家をして、三百年覇府の基をかためしめたてせうか。歴史の面目は如何に轉化して居つたかは、測り知れない事だつたらうと思ひます。

さてこの不識庵謙信、彼は其少年時代に於て、如何なる徑路を経て来た人てせうか。

二

謙信は幼名を虎千代と申しました。後に至つて、景虎、剃髪して謙信と云つたのです。さて其虎千代時代には、實に大變な腕白小僧でした。大體、豪傑風の人間は、幼少から腕白者であつた様です。しかし、腕白だからと云つて、必ず豪傑になれるといふ筈はありません。兩親の云ふ事を聞かず、腕白横着が、豪傑に必ずなり得るなら、天下の少年は皆豪傑になるわけですが、そんな事になれば、世界は豪傑に食傷して了ひます。たゞ其腕白と云つても、普通の子供の腕白とは、少しちがひます。ビスマークでも、太閑様でも、



僕等の講演會

矢張同じ腕白小僧であつたが、それがつまり人を威服させるといふ性質が小さな時からあつたので、凡人の小僧の様に、道傍で鐵砲花火を擧げて人を威かしながら、巡査が來たら直ぐと逃げるといふ様な、又、暗い往來へ薪棒を置いて、人が躓いて倒れるのを、影から見ても笑ふといふ様なそんなコソ泥棒の如く腕白ではありません。お話しが少し理窟めいて申譯がありません。で、謙信の虎千代は、どうも腕白で仕様がなから、両親はこれを怒りまして、『こんな腕白小僧は、僧侶にして下へ！』といふので、春日山の林泉寺といふお寺へやられて、そこの住職天室和尚の弟子とさせられました。こゝ等は太閤様によく似て居ります。大昔は、よく此小さな時分から寺へやられ事があつたもので、町人の子等は出世さす前に寺へやられ、大名の子の腕白ものは、世

捨人として寺へやられ 貴族の二男三男も、よく此寺入をさせられたものです。漁夫の子で、寺へやられて大人物となつた日蓮上人、百姓の子で寺へやられて、逃げ出して天下を取つたのが太閤様、其他義經は鞍馬山の寺へ、五郎時致は箱根権現へ預けられました。日蓮の如き、宗教の大家となる人は格別、戦國時代にあつて、功名をあらはさんといふ志のある少年は、寺で辛抱をする筈はありません。太閤様も義經も、五郎も皆寺から逃げ出したぢやありませんか。謙信の虎千代も、この例に漏れませんでした。さて林泉寺へ、あづけられた虎千代は、少しも落附いて、お經なんかを稽古する事はなく、和尚のいふ事とチツとも聞かない。お寺の所化や役僧なんかは、無論何とも思つて居ない。寺の門前に多くの近處の子供をあつめて、旗をこさへ、太鼓を鳴らし、

「さあ、戦争だ！戦争だ！」
 という調子で、隊を二つに分け、厥り逢ふ、打ち合ふ、叩き逢ふ。
 逃げる子、追ふ子、泣く子、怒る子、喚き叫ぶ其聲は、近所近邊へ
 響いて、その喧敗いといふ事は、實に大變なものでした。

三

その時、虎千代まだ八歳、もとより未だ思慮のかたまらな一幼
 児でありまするが、これが所謂戦術の天才とていふのか、蛇は寸
 にして人を呑むの概ありて、其ワイく〜とやつてゐる子供喧嘩が、
 中々大人も及ばない、立派な進退御座いました。
 領主より預かりした虎千代君の事、和尚はもとより心配でなり
 ませんから、ソツと窓の内からこれを見て、

『如何にも腕白者だ。が、あの群童を指揮する態度は、實に大將の
 器量がある。あの子は決して僧となつて、讀經托鉢の中に暮らす
 べきものでない！』

と、この和尚も流石に眼識があつたものと見えて、すぐと虎千代を
 呼びよせて、その事を云ひ聞かせ、父爲景の處へ、送り歸しました。
 處が、父の爲景は、名將謙信の父として、あまりにえらい人とな
 かつたと見えて、大に怒つて、

『父の命を背く、いたづら者め！』
 といふので、虎千代を枳尾といふ處へ移しました。

さて、越えて天文の十一年、十二月の事、加賀の國から、椎名、
 神保といふ二人が兵を起し、謙信の父爲景に叛きました。爲景はこ
 れを迎へ撃つて、梅檀野といふ處まで參ると、不運なるかな、賊の

爲めに誘き出されて、到底無惨の最後を遂げる事となりました。
さあ、大黒柱が倒れました。あとに残つたのは、景虎千代の事
に兄の三人であります。長男を晴景次男を景康、三男を景房、四男
が景虎です。

まづ、長男が家督相續をする事は、日本の規則ですから、晴景が
父の跡目を継ぎましたが、此人は所謂總領の甚六で、少し恐かしい
人間でした。だから家來が一向信服しない。

かういふ亂脈な時代には、佞奸な奴が出るもので、ゴタ／＼紛れ
に自分の腹を肥さうといふ胎田常陸といふのが、同志を語らつて、
景康及景房を殺しました。つまり馬鹿殿様だけを殘して置いて、自
分が勝手な事を仕様といふ考、さあ四男の景虎の命も、實に風前の
燈火で、危険千萬で御座います。

四

其時景虎十三歳、僅に身を以て逃れました。姿を見せては危い、
といふので氣轉の利いた忠義な家來が、簀牀の下へ押しこんで、夜
になつて、喚起して見ますると、景虎はグ／＼眠て居るぢやあり
ませんか。

險呑も險呑も大險呑の、劍の中の様な此場合に、しかも高野に眠
るといふ其膽氣、家來はそとろに舌を巻いて、恐れ入つて了ひまし
たが、何時まで左様してゐるでもありませんから、ゆり起して、以
前暫時腕白をして暮した、かの春日山林泉寺へやつて参り、和尚に
托しました。

和尚はもとより志あるもの、すぐと景虎と柄尾へ行きました。こ

て景虎は、諸老臣を召しよせて、申渡しまする事には、
 「わしは今日まで父様のお蔭で、何の苦勞もなして暮したが、かう
 國が亂れて來ては、安閑としてゐる處ぢやない。わしはこれから
 諸國修行に出て、山川の間に武を練り膽を鍛へようと思ふ。皆の
 者は兄上をお助け申して、長尾の家を亡ぼさぬ様に致して呉い！」
 と、いひながら涙をハラ／＼と溢しました。

老臣共は承つて、若君の殊勝な志に、暫時は物も得云はず、さし
 俯向いて居りましたが、やゝあつて、

「若君、今御領土の危きに臨み、御出國相成りまするは、先君に御
 孝道とは存じませぬ。今暫く、御止まり下されませ！」

と申し上げたが、中々聞入れさうにもない。
 その中に敵の搜索が勝敷といふ注進がありましたので、今は是非



なくも其心に任せる
 ことゝ致しました。

景虎は行脚の姿甲
 斐々々しく、笠を頂

き草鞋を穿ち、十四
 人の従者をひきつれ

て、米山といふ山へ
 登りました。

山の上から府内を
 見下し、地形をなが

めて、

「あゝ、佳い處だ。」

わしは此後この處を陣としよう！』
といひつゝ、父の殺されたる、梅檀野へやつて來ました。

『あゝ、父上は此處で、敵に害され玉ひしか！』

と思へば流石豪氣の少年も、堪へ兼ねて地に手をつき

『父上様、虎千代必ず御仇を討ち奉り、尊靈を慰め奉ります！』

と生きたる人に物いふ如く、涙ながらに其處を立ち出て、これか

ら北陸東山を遍歴し、山を登り、谷へ下り、あらゆる辛苦艱難をし

て、彼方の城、此方の砦、其攻口は、其防所は、と一々胸にたゝん

てまた其上に精密なる圖を造りました。

北陸東山諸國の要害は、今は盡くわが胸に收めました。景虎は此

時家來に向つて

『わしが此後、打つて出る時があつたら、まづ北陸道をわが物とし、

家來に盡く分け與へて、京洛への交通を便にし、然る後畿内を從

へ、禁裏を守護し奉り、將軍を助けて、天下に號令しよう！』

と、あゝこれが僅に十三歳の子供から出た言でせうか。併し諸君、

人間は其年齢によつて、其志を測る事は出來ないものです。戦亂の

中に生れた天才の兒たる景虎が此豪語を吐いたのは敢て不思議とす

る事はありません。

これから行き行きて、尙も諸國の風俗をさぐり、遂に江州の琵琶

湖を渡つて、つゞり叡山へ登りました。

五

叡山の事は、前の雪の口演によつた詳であるからこゝには申しま
せん。梵聲雲にひびいて、谿幽に、風塵訪れずして靈禽の鳴聲しづ

かに、實にその昔釋尊が、法を説かれし靈鷲の山も、かくやと思はれる靈山で御座います。將來の武將たる景虎は、この閑寂の地にあつて、何を學びましたか。

諸君、景虎はこゝて佛典を讀み、文學を學びました。如何に拔山の勇があつても、文學に疎きものは、眞の大將となる事は出来ません。景虎はそんな片輪な大將となる事を思ひませんから、朝に雲間に想を練り夕には清泉に下り立つて、和漢の書に眼を曝らし、一度は春日山林泉寺に、看經を厭うた幼兒虎千代は、こゝに經卷の中に身をひそむるの人となりました。景虎の人格は、實にこゝて養はれたと私は思ひます。かの敵に鹽を送るの雅量、陣中名月に對して吟懐を恣にする風流は彼が此仙境において得たる大なる修養からであると信ずるのであります。

此時、京都に宇佐美定行といふ武士が居りました。此人も武一遍の人ではありませんが、時に叡山に登つて、書を讀み、文を講じて居りました。此頃登山されたる越後の公達景虎の體度を見るにつけ、實に將來の大將軍と、望みを屬しましたから、景虎に近よつて、種々話しをして見ると、思ふに違はず、大志がありますから、こゝで君臣の義を結びました。此定行も、もとは上杉氏の客將であつたのです。悪臣が蔓るのを見て、密に京を出て、風雲の際會するのを待つて居たのであります。然るに計らずも、景虎といふ雲を得ました。茲に於て、かれは景虎の參謀長となり、將來の發展について大に計る處があつたのであります。

さて、其後一年の間、景虎は仙境の生活を續けたのであります。時に仄かに國の動靜を報ずるものがありました。此頃はもはや兄晴

景あつてもなきが如く、奸臣我意をふるうて、民百姓はたゞ苛政に苦しんで居るといふ事てあります。

聞くなり景虎はすぐと下山して故郷の越後へ向つたのであります。地中にひそんで居た蛟龍は、飛び出たので御座います。定行參謀長がお供したのは、申す迄もありません。

すはこそ、末つ兒の景虎が出て來たぞ、と少年ながらも景虎の勇壯なる事を知つた敵方は、直ちに軍を向けました。聞くより景虎は「手を束ねて、おめく」と賊に捕へらるゝものか！」

と例の謀將定行と、乳母の夫の本莊慶秀とに謀つて、われから出て、まづ椽尾の城を攻め落し、これに據りました。

これが上杉謙信の十四歳の初陣で御座いました。其後奸臣たる俊景を討ち亡ぼし更に家臣を京師へ遣つて、賊を討つ勅を乞うて許

されました。

勅なればいと畏し、て御座います。少壯の景虎、こゝに、勅令を奉じて賊を討つ、といふのだから凄まじい。其勢實に破竹の如くであります。

六

天文の十六年、晴景の族、政景が大舉して、襲ひ來した。謀將宇佐美定行、出て、戦はうとすると、此時城の櫓に登つて、遙かに敵の動靜を見て居た景虎は、

「敵は久しく居らずして退いて行くぞ。退口に撃つて取れ！」と云ひました。夜半に至つて、景虎が言に違はず、敵は退きかけました。こゝに於て、三千騎を以て大に討ち、更に追撃して、敵が嶺

を過ぐるを待ちて、粉微塵に破りました。
 謀將、宇佐美定行は、其左右の將士に向つて。
 「敵の險にをる時、これを討てば、味方に損害多くして、却つて、
 敵に利を占めらる。敵の嶺を過ぐる時、高きに乗じてこれを追下
 せば、敵の敗滅この通りぢや。あゝ、我君の智謀、お年の若さに
 實に驚き入る！」
 と賞めた、へました。

此年政景は降参をし、晴景は自殺をしました。諸君、晴景は景虎
 の兄であります。表面から申せば、景虎は手を下さぬまでも兄殺て
 あります。しかし兄は暗君で、奸臣のために、遂に身を亡ぼしたの
 です。兄をして自殺せしめたのは、もとより景虎の大に嘆く處で御座
 いました。景虎の眞意は、兄の傍にある悪逆の臣を拂つて、父祖傳

來の家を守らうとしたのでせうが、兄の方に取つては、家來が降参
 をしたり、或は戦死をすれば、勢、武士の體面上、自刃をせねばな
 りません。戦國の時代には、實にかゝる悲しむべき事が、往々あつ
 たので御座います。

だから、後に至つて、越後を平定した景虎、臣下及人民の、望み
 によつて、越後の大守に推された時、これを辭していふ言に、
 「わしは上下の爲に迫られ、兄の軍に向ひ、剩、兄を自刃せしめた
 不悌の身、大守處か、今より髪を下し、山林に逃れよう！」
 といふので、こゝて髪を削つて僧となり、名を謙信と改めて、紀州
 の國は高野山へ上らう、としまたが、諸將士は連署して引止める、
 民百姓は泣き叫んで訴へるといふのを見るに忍びず、遂に越後の大
 守となりました。

虎千代の景虎は、京洛の將軍から偏諱を玉はつて輝虎といひ、後に剃髪して、こゝに上杉謙信となりました。年僅に二十二歳、實に若い法師で御座います。

其後の謙信が、尤も時の舞臺の謙信で御座います。こゝに信玄といふ好敵手あつて、信州川中島の大戦争、史上に花咲く車がりの軍法などは、餘り長くなりすぎるから、こゝに略します。

終りに臨んで、かれが八歳の時預けられた春日山に、被は不誠庵といふ庵を建て、軍務の暇には、常に好んで、こゝに行き、閑寂を樂しんだといふ事を申しておきませう。嗚呼不誠庵謙信、彼は實に戰國時代の武士の中で、尤も高尚なる人格を持つて居つた人といふことを贊美して、私はこの口演を終ります。

◎花

これから愈々兵打の先生だ。僕も此次は何かやりたいものだ。先生のお話しなさるを一々聞いて覚えて置かう。花といふ題で、先生は如何なる偉人を促へて來らるか。僕は一句も聞き洩らしてはならぬ。(仁田生記)

▲菅公

諸君、私は花といふ派手な題を得ました。大體花といふものは、多くは春吹くもので、春は一年の初めてあるから、私が一番初めに話しする筈だが、雪月花、といふ順序で、一番了ひに廻されまし

た。
 そこで、此花といふにも色々ある。其一番初めが梅の花で、これは何年かの、勅題にも、梅花先春、とあつた如く、春に先つて咲くものです。一番お仕舞ひが菊の花で、これは陶淵明といふ聖人が大層好んだ花で、隱逸の姿ありと形容をいたします實に貴い花であります。此間には、櫻、杏、梨に藤、五月、躑躅、菖蒲百合其他秋の七草野山に咲く種々の花など、數へ立てれば、我日本に咲く花だけでも實に濱の眞砂の夫れの如く多う御座いませうが、まづ今日の處、單に花といへば、何だか春の景色が思ひ出されますし、春といへば、梅桃櫻の美觀が目前に描き出されます。此中ても、梅は其清節において、君子の風がある様で、櫻は本居先生の名題にもある通り、敷島の和心と咲き匂ふので御座ります。日本の古言にお

いて、花と稱するもの、考證は、随分八釜敷事もありまするが、こゝには略しまして、先、梅と櫻とに對し、偉人を聯想して、お話することゝ致します。

二

諸君、私は梅花を見て直ぐと思ひ浮べる偉人は、菅公で御座います。これは、菅公の紋が梅鉢であるからといふのではない。又菅公が梅花を大層愛されたといふからでもない。ただ何となく、其南枝より奮ぶ君子の如き花の姿を見ては、清く高き道實公の人格を思ひ出させるのです。私はこゝに菅公の少年時代をお話し申すのは、非常なる愉快を感じる處で御座います。

菅公の先祖は、角力道の開山、野見宿禰で御座います。角力道の

開山と云つても、何にも今の常陸山や梅ヶ谷の様に、角力取てはなかつたので、ただ非常な強力であつたから、人と力を角して、其力量を認められたのです。中にも當麻蹶速といふ強力者と力較べをして、これを倒殺したといふ事が御座います。大體、倒殺すなどいふ事は、これは角力道には無いのでありますが、此時は野見宿禰は兼てより當麻蹶速が悪逆無道の男で、自分の強力を特んで、多くの人を惱め苦しめるといふ事を聞いて居つたものですから、わざと倒殺したので、つまり多きいへば國家の爲、良民の爲めに、其禍を絶つたのであります。

此人が、大和國菅原邑に住みまして、其十五代目の古人といふ代に至つて、其邑の名を取り、姓を菅原としたのです。其古人の孫にあたる是善といふので即ち菅公の父君であります。



僕等の講演會

菅家は、代々博學を以て世間に聞えて居りまして天皇の御師範の家柄で御座います。菅公も幼少の時から、學問を好まれました。もとより後世には文學の神とも仰がれる位の方ですから、一を聞いて十どころか、二十も三十も知るといふ明智、早く和漢の學に通じて詩文などは實に一かどの者とあられました。

これは實に有名な話してあるが、と云つてこれを抜きにしては順序が悪い。菅公十一才の春、ある夜月面白く庭前の梅花を照らして、實に得も云はれぬ、景色で御座いましたから、父の是善卿は島田忠臣といふ家來を召してそれを御覽じ、

「梅月のながめ、中々の風情ぢや。詩でも作つて遊ばう！」と仰しやると、家來は「ハッ」と畏まつたか、兼て内密に是善卿から機があつたら道實の才を試せよ、と仰せ附かつて居るものですか

ら、此時こそと、傍にある道實を顧みて

『若君には、近頃詩歌の道に御出精に御座りますれば、まづ若君より』

といはれて言下に道實は、

月耀如晴雪。梅花似照星。
可憐金鏡轉。庭上玉房懸。

といふ五言絶句を吟ぜられました。座に居る人は、實に其詩才に驚きました。

三

貞觀の元年、十五才で元服されました。此十五で元服するといふとは、随分古昔からあつた習慣と見えまして、今てこそあまり聞か

なくなりましてしたが、十五六年以前には、東京や大阪なんかで、元服といふ事は盛んにやつたものです。今でも田舎へ行けば、随分此習慣は残つて居ませう。元服といふのは、男一人前に成つたといふのです。今ならまだ中學の一年や二年で、男一人前も何だか可笑しなものです。何はさておき菅公は十五才で元服されましたが、その時母君は、喜びのあまり、

久かたの月の桂も折るばかり

家の風をも吹かせてしかな

といふ歌を詠まれました。

さて、其頃から、菅公は、都良香といふ大學者の處へ、勉強に通はれました。此人は實に當時第一等の碩學であつたので御座います。

家にあつては、父是善卿の教を受け、外にあつても此碩學の薰陶によつて、學業の進む事は、實に驚くべき程で御座いました。

菅公十九の年の正月お師匠様の良香の處へ行かれますと、今日は讀書學問をやめて、門弟共は皆々弓術を競べて遊んで居ります。

菅公は、學問における天才で、其進歩の著しい事、上下おしなべて驚入る程でしたから同輩の朋友だから、常々猜まれて居ります。猜んだ處が出来るものは出来るのだから仕方がない。各其下風に立つて居りましたが、今日は平常とは異つて武術の腕競だ。道實いかに秀才でも、書物の中に埋もつてゐる儒者の子、まさか荒くれたる弓矢の法は知るまい。今日こそ恥をかかせてやらうといふので、
「ヤア。これはく道實殿にはよろこそ御尊來、春の初めの吉例に、一矢射させたまへ。さあ〜。」

としきりに勧めました。

道實は迷惑顔をして、しきりに辭退致しますると、さてこそ弓術を知らぬと見える。得たりかしこし、苛めてやらうと、

「まあ、さう仰しやらずに吉例でござる！吉例でござる！」

としきりに吉例を振廻して、是非々々と勧めました。

今は詮方なくも道實公

「左程まで仰せあるなら、未熟で御座るが、一矢試みませう！」

といふので、片肌押し脱ぎ、弓に矢をつがへ打上げ、打ち下し、やがて満月の如くギリ／＼と引しぼりたる其體度、進退一々禮に叶ひ、あつばれ弓矢の名人の風が備はつて居ります。これはと皆々驚く中に、飄と切つて放した矢は、矢鳴りをなして誤またず、的の中央を射貫きました。

「出来されたり！」

と賞めたつる其中に、續けて二の矢三の矢四の矢、五六の矢まで命中、實にも百發百中とは此事で御座います。

並居る人々ただ驚くばかり、文に雄にして、武に疎しと侮つた連中は、ただわが身に恥ぢてさし俯向き、その後は菅公に向つて、心から敬服したとあります。

四

ただ今申しました話しは、釋尊の少壯時代によく似て居ります。大體他人の弱點につけこむとか、又弱點を擧げて罵るとか侮るとかいふのが小人のよくやる事ですが、三界の恩師釋迦牟尼が、未若年の頃、學事に於ては隣國の諸王の盡く認める處でしたが、武術に於

ては何等の技量なしと認められました。特に其頃の印度は、強食弱肉、所謂兄弟橋にせめぐといふ戦國時代でしたから、いくら學者でも、柔弱なものでは仕方がない。そこで隣國の王は誰あつて、太子悉多の配遇者として、其姫を遣らうといふものはなかつたのです。そこで、父君の淨飯王は大に心配でありましたが、此事を聞いた悉多は、いて我はわが武術を示して、父王の安心を買はう、といふので、ある日近國の諸王を招いて、其席上で、弓馬槍刀の術を試みました。處が、後には世界の惡魔王をも叱咤消滅せしむる位の大覺世尊、それ敷の事は何でも無い。いづれも其法に叶ひ、其奥を極めて居られたから、諸王は舌を巻いて驚き、こゝで耶須多羅姫といふ才色兼備貞節無比の奥方を得られたといふ事です。文事あるものは必ず武備あり、と古言に申しまして、ただ今てこそ文學博士は必らず

鐵砲が上手といふわけには参りませんが、その昔一代の偉人とも云はれた方々は、武將であれば、文事を兼ね、學者であつても、武術をよくしたものと見えます。或は其人をして、彌高くせしめんが爲めに、後世の歴史家が、少しは附會したこともあるでせうが、とにかく菅公が、若い時分から、元氣のあつた方といふ事は、此一事で分りませう。

さて其後の菅公の出世といふものは、實に素晴らしい者で、其年に文章生に擧げられ、後七年を経て貞觀の十二年三月、試験に及第して、即日正六位の上となり、翌年には左蕃頭、次第に昇つて、三十五才の時には文章博士從五位上式部少輔とされました。中途には一度讃岐の國司に任ぜられました。五年にして、召還され、宇多天皇の御用ゐによつて、とうとう右大臣の重職につくこととなり

ました。

この時、藤原の時平が、菅公を猜んで、讒言をしたといふ事は、既に知れ切つたお話ですが、この事に就ては、歴史家の中に種々の議論もあり、高山博士なんか、様々の考證として、論じて居られますが、其政事家としての技能はとにかく、極めて崇高なる人格を有したる大忠臣であつたといふ事は、今更申すまでもありません。

梅花は菅公の紋處でありました公の好ませられた花です。其芳香は四邊は薫して、菅公と共に千載の下に名をとどめて居るのです。私は、梅花については、更に梶原景季、安部宗任などを思ひ出しまするが、それは略して、これから敷島の大和心を人間はば、旭日に匂ふ山櫻花のお話に移りませう。

▲三吉野の花

三吉野の櫻花は、富士の根の白雪と共に、わが日本國を飾る尊き名所で御座います、春去り秋來り、人は死し世は移りましても、吉野山に咲く花の色は、今も昔も變りはないので、實に古句にもありまする通り『これはくくとはかり花の吉野山』で、吉野の山に萬孕の花を見た時は、これはくくとより外に、出る辭がないといふ位、美しくしきながめであります。

今から百年も以前のお話し、頃は櫻咲く彌生の半、吉野の山は西行庵のほとり、一層美しく咲き亂れたる一本の花の陰に、一人の老人が、まだ若い盲人を連れて、淋しく休んで居りました。盲人の花

見、如何にもおどけて居りまするが、思えて見れば此美はしき景色の吉野へ来て、一目千本の眺めも叶はぬとは、實にあはれな風情で御座います。

こゝへやつて参りましたのが、藤門秀齋といふ歌人で、何がさて旅の事ですから、かの老人や盲人と、心易く話しを致した末、折角吉野へ来て、花の下でお話し申すも他生の縁、三十一字でも咏んては如何といふので、かの盲人は一首を咏じました。それが、

盛りにはいづれをそれとしら雪の

かゝるも匂ふ三吉野の山、

といふのです。秀齋といふ人は、目前に千本の花を見て居てさへ、まだ一首の歌も出来ないのに、月にも花にも暗の盲人が、この名吟を咏み出でたので、大に感心を致しました。



僕等の講演會

あゝ、「歌書よりも軍書にかなし吉野山」て、吉野には、申すも畏き、南朝の御事蹟もあります。正行公が「かへらじと」の歌で名高き、如意輪堂もあります。義経公に生別れた静御前の歌も残つて居ります、山陽が母を奉じて遊んだ話など、古今の物語は数へ立てられぬ程あります。私はさういふものに比しては、極めて小事件で、歴史の一行にだも記されない、此花下の盲人を、何となあくはれに見るので御座います。

諸君、唯今の話しは、歴史に何の關係もない様ですが、此若盲人はたしかに徳川文學史を飾る人であります。彼は後に至つて、殆んど人間の精力の如何ばかり續くかを後人の模範に残した、群書類從の著者として有名な、國學の大家、塙保巳一てありました。そして、其老人は彼の父であつたのです。

二

保巳一は武藏國見玉郡保木野村に住んで居た、宇兵衛といふ貧乏人の子であります。五才の時に病氣にかゝつて、其爲に兩眼はピツタリ盲ひました。十二才の時に母を失ひまして、あとは親一人子一人、實に淋しく暮して居りました。

何分盲人の事ではあるし、何として父の手助けをする事も出来ません。貧しき闇の中に保巳一は種々と心を苦しめましたが、キと心を決して、

「いくら不具でも、勉強をすればえらいものになれる事はない。あれは一番江戸へ行つて身を立てよう！」
といふので、これを父に願ひました。父も初めは此小盲人を、江戸

へ手放すのは、如何にも可憐想だ、と思ひましたが、何分本人の決心が堅いものですから、これを免しました。

寶曆の八年、保己一、年十三才にして江戸へ出ました。その時は唯一人で出府したといふ説もあり、又父に送られて出たといふ説もあります。盲人の事だから、父が送つて出たといふ方が自然でせう。さて、江戸に着して、種々と身の振り方を考へましたが、唯今ても同じ事、まづ盲人の仕事といふのは、多くは琴三味線か、按摩鍼灸位のものです。そこで、保己一も、當時四谷に居た、雨宮須賀一といふ檢校の處へ門人として住込み、名を千彌と云ひました。

處が琴三味線を教へても、たゞ其歌の文句をよく覚えるだけで、手の方は一向ダメです。按摩按摩揉療治は、これはテンカラ不器用です。師匠は、これはと首を傾け、朋輩は皆笑つて居ります。

しかし、盲目にしてわが國文學上の一明星となり、立志編中の立物と成つた保己一の千彌は、初めからそんな活業をして、世を送らうとは思はなかつたので、彼はたゞ學問をしたいとばかり望んで居りました。だから、唱歌の文句は一度聞けば決して忘れず、暗誦をして居たのであります。

師匠も、千彌の體度が、如何にも尋常でないから、ある日、千彌を膝近く招いて聞いて見ますと、千彌を涙ながらにいふ事に、『お師匠様、私は學問を勉強致したう御座います、何分盲目で書物を読むことが出来ません。残念に存じます！』

と聞いて師匠も中々分つた人ですから、

『それぢや其道の人に就いて學べば能い。しかし、わしは知つての通り、鍼灸琴三味線の弟子を仕立、それで暮してゐるもの、其他

の道の者を、長く養つておくといふ事は出来ぬ。そこで三年間は、置いてやるから、その間に身を立てる様にせよ！』
 といはれて保已一大に喜び、それから萩原宗固に就て和歌を川崎貴林に就て儒學と神道とを、山岡明阿彌に就て律令を學ぶこととなりました。

三

諸君、私はこれから保已一の信仰に就いて述べたいと思ひます。彼には一つの堅い信仰がありました。それは天満大自在天神を信仰する事でありませぬ。

天満天神は、菅公を祭つたといふ事は申迄もありません。梅花を見て菅公を聯想する私は、こゝに梅花の條のついて、殆んど此梅花

の神ともいふべき菅公を信仰して、千歳の遺香を身に占め、わが國文學上に盡したこの盲偉人を語るのは、如何にも不思議の因縁の様にも思はれます。

貧乏人の子の盲人保已一は、江戸へ來ても依然貧乏人たる事は、云はずとも知れた事です。まして、金になる仕事をしないで、金のいくらか入る學問の修業をするのですもの、これが實に貧乏の極點ともいふ位で、見えぬ眼から熱い涙をこぼす事は屢々ですが、しかし彼には、動かすべからざる熱誠と、燃ゆるが如き信仰とがあつて、其貧しき暗黒界から、一道の光明を認めて進んで行くのであります。彼は四谷の師匠の家から、麴町の平河天神へ日參を致しました。雨の降る日も雪の日も、一日も缺かさず杖を力に參詣して、お堂を巡つて拜むことが百度、所謂お百度といふものです。それを千日續

けたとは、實に彼が意志の如何ばかり強かつたかゝ分りませう。誰かこれを迷信と申しせうか。これが迷信ならば、凡ての宗教信者は悉く迷信であります。誠意を神明に盟ひ、天を畏れ、正義を踏んで精勵する、わが保巳一は、實に後世億萬の人に、襟を正さしめるてはありませんが。

此の如くして、奮勵した結果、彼の學業の進歩は、實に著しいものでありました。年齢僅に十八才、彼が千瀬より保巳野一と改めた時は、一かどの先生でありました。

諸君、こゝに情無い事には、此小盲人が、如何にも薄柳の質であることとす。大方精神と身體と、過勞の結果でも御座いましたらう。可憐い子ではないが、今は可愛い弟子となつた、保巳野一が、身體がブラ／＼悪くては師匠も心配です。そこで師匠は金五兩を出し

「保巳野一や、お前、氣保養に、伊勢参りから、京大坂へ行つて来るが宜い！」

といはれて保巳一は、有難涙に暮れまして、父に連れられて、江戸を出立をしたのが、明和三年、彼が二十一才の時御座りました。

まづ初めには神風の伊勢の國に、内宮外宮の御社を拜み奉り、二見ヶ浦、五十鈴川をも、見物といひたいが、たゞ其水音ばかり聞いで、やつて来たのが、京都の地、蒲團来て、臥たる姿の東山、三十六峯の翠色は眼には見えぬが、こゝが祇園、清水、大佛、黒谷、と父に教へられては、書で覺えた其一本を思ひうかべて、たゞ何となく心樂しく、西山の方へ来ては、嵯峨野に小督を偲ひ、嵐山に、天皇の御遊をおもひ、釋迦堂大覺寺など見廻つて、北野の天満宮へ参

りました。
 「保巳野一や、こゝがお前の信仰する、北野の天神様ぢやー」と父にいはれて保巳一は、身内もふるふばかりに覺えて、神前にひれふし、拙き身を今日まで、守りたまへる有難さを、涙ながらに御禮を申上げ、しばし其頭を得擧げませんでした。
 京都から大坂へ参り、住吉、天王寺まで、須磨浦、明石湊、古き歌枕を心に描いて、再び大坂へ歸り、今度は泉州堺から、紀州へ這入り、和歌の浦から高野山へ行き、大和へ入つたが、丁度彌生の半名に高き吉野の櫻は、今が満開と開いたので、父にも見せたし、われも亦せめて匂ひても嗅いて見せや、と吉野山へ参つたのが、即ち前申した、盲人花下に一首の歌を咏するといふ一幕となつたのであります。

此長途の旅行で、彼れは如何なる精勵にも堪へる程の健康體となりました。歸來、益々奮勵しまして、加茂眞淵を師とし、眞淵没後も、少しもひるまず勉學しましたから、遂に國文學の大先生となりました。

かれは二十九才で、句當となり、更に檢校に登り、寛政五年官に申して、和學講談所を設け享和二年盲人一座の總録となりました。彼が、群書類従を初め、其他何千卷の大著述を、後世の吾人に殘して置いて呉れたのは、實に我國民の感謝に堪へん處、一面國文學上の大功臣たる彼は、一面青少年が立志成功の模範的人物として、實に其大精力を仰ぎ貴むべきであります。

私は、菅公及び其の後世の信仰者たる盲人の大精力家を、こゝに聯關してお話し、たことを、非常に愉快に思つて、此の口演を終り

ます。

(了)

偉人の少年時代終

明治四十一年八月十五日印刷
同 年八月十八日發行

偉人の少年時代奥附

正價 六拾五錢

著 者 福 田 琴 月

發 行 者 增 田 義 一

印 刷 者 天 野 耕 一

印 刷 所 株式會社 秀英舎 第一工場

不許複製

發 兌 元

東京市京橋區南
紺屋町十二番地

實業之日本社

電話新橋八七四番 電話新橋四二九六番(編輯用)

(郵便振替貯金口座發元六番)

大賣捌所

東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂、至誠堂、大阪盛文館
杉本書店、名古屋川瀬代助、京都東枝律書房、久留米菊竹金文堂

米國エグルストン氏著 蘆川忠雄君譯
處世經濟法
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 拾
◎◎◎郵稅 四 錢錢册

實業之日本社編纂
處世座右訓
◎◎◎袖珍 拾美
◎◎◎正價 貳 錢錢本
◎◎◎郵稅 貳 錢錢本

實業之日本社編纂
處世要訣
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 四 拾
◎◎◎郵稅 六 錢錢册

米國富豪自グラハム翁書信、實業之日本社翻譯
助的成者
處世教訓
◎◎◎正價 四 拾 錢
◎◎◎特別上製 拾 錢
◎◎◎金文字入 拾 錢
◎◎◎郵稅 八 錢

實業之日本臨時增刊
處世の金科玉條
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正價 二 拾 錢
◎◎◎郵稅 二 錢錢册

實業之日本社編纂
成功錦囊
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 六 拾 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢册

山方香峰君著(史筆超邁)
一國近世人傑傳
◎◎◎上製金文字入
◎◎◎正價 八 拾 錢
◎◎◎郵稅 八 錢錢入

報知新聞記者 佐瀬醉棗君著
當代の傑物
◎◎◎上製金文字入
◎◎◎正價 八 拾 錢
◎◎◎郵稅 八 錢錢入

山方香峰君著(面目活躍)
世人豪の片影
◎◎◎中版 拾美
◎◎◎正價 五 拾 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢本

實業之日本記者 石井白露君著
成功十傑
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 五 拾 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢册

最近 桑谷克堂君著(活教訓)
成功富豪の面影
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正價 五 拾 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢册

高田坪内有賀三宅田中館諸博士追懷文
伯爵 大隈重信君序 湯田斬雲君著
天下の記者
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正價 五 拾 錢
◎◎◎郵稅 八 錢錢册

英國リチー氏著 山崎梅處君著
富豪實驗教訓
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正價 六 拾 錢
◎◎◎郵稅 八 錢錢册

波多野鳥峰君譯著
處世の標準
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 貳 拾 五 錢
◎◎◎郵稅 四 錢錢册

波多野鳥峰君譯著
成功の順路
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 卅 五 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢册

英國ゼローム、ケイ、ゼローム氏著
日本波野鳥峰君譯
人生の半面
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 卅 五 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢册

米國女學記者ペエン氏著
實業之日本社翻譯
女子處世訓
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 卅 五 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢册

長谷川岩吉君述 上村玉絲君編
刺繡獨習書
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 卅 五 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢册

實業之日本社編纂
人物の解剖
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 五 拾 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢册

米國ルーズベルト著 山崎梅處譯
奮闘の典型 クロンウエル
格の典型 クロンウエル
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正價 拾 錢
◎◎◎郵稅 拾 錢

鈴木光次郎君著
名家流奇談
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正價 四 拾 錢
◎◎◎郵稅 四 錢錢册

實業之日本社編纂
日本富豪の家風
◎◎◎全一 拾美
◎◎◎正價 五 拾 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢本

阿部長咲著
健全なる家庭
◎◎◎正價 卅 五 錢
◎◎◎郵稅 四 錢錢

報知新聞記者 天野誠齋君編
家庭日常の實驗
◎◎◎大版 拾美
◎◎◎正價 四 拾 錢
◎◎◎郵稅 六 錢錢本

法學博士 和田垣謙三君序
高橋五郎君序 蘆川忠雄君著

人生の慰安

島田三郎君序 蘆川忠雄君著

常識の修養

男爵澁澤榮一君序 蘆川忠雄君著

實務才幹訓練

男爵前島密君序 蘆川忠雄君著

人生の奮闘

英國ウキリヤムコベット氏著
法學博士 高田早苗君序 蘆川忠雄君譯

青年處世法

伯爵大隈重信先生序 蘆川忠雄君著

樂天の生活

蘆川忠雄君著

應對談話法

英國グランゲキル博士著 海嶽生譯

簡易安眠法

英國グランゲキル博士著 海嶽生譯

神經健全法

蘆川忠雄君著

心機轉換法

蘆川忠雄君著

頭腦明快法

英國グランツキル氏著 蘆川忠雄君譯

最新記憶法

◎◎◎大版 全一拾
◎◎◎正價 八五
◎◎◎郵稅 八五

◎◎◎大版 全一拾
◎◎◎正價 八五
◎◎◎郵稅 八五

◎◎◎大版 全一拾
◎◎◎正價 八五
◎◎◎郵稅 八五

◎◎◎大版 全一拾
◎◎◎正價 六五
◎◎◎郵稅 六五

◎◎◎大版 全一拾
◎◎◎正價 八五
◎◎◎郵稅 八五

◎◎◎大版 全一拾
◎◎◎正價 八五
◎◎◎郵稅 八五

◎◎◎中版 全一五
◎◎◎正價 四廿
◎◎◎郵稅 四廿

◎◎◎中版 全一五
◎◎◎正價 四廿
◎◎◎郵稅 四廿

◎◎◎中版 全一五
◎◎◎正價 四廿
◎◎◎郵稅 四廿

◎◎◎中版 全一五
◎◎◎正價 四廿
◎◎◎郵稅 四廿

◎◎◎中版 全一五
◎◎◎正價 四廿
◎◎◎郵稅 四廿

◎◎◎中版 全一五
◎◎◎正價 四廿
◎◎◎郵稅 四廿

報知新聞記者 中村木公君編

名家長壽實歷談

堀内新泉君著

精力増進法

東京朝日新聞記者 杉村縦横君編

肺病全快談

谷子爵題字 萬朝報記者 中島氣峰君著
大石正巳君序

禁酒禁煙の五年間

蘆川忠雄君著

決斷力修養

米國理學士大木新三 鈴木精一 共著

新式代數難問詳解

◎◎◎上製クローリス
◎◎◎金文拾字入
◎◎◎定價 八拾

◎◎◎大版 全一拾
◎◎◎正價 六五
◎◎◎郵稅 六五

◎◎◎中版 全一拾
◎◎◎正價 六五
◎◎◎郵稅 六五

◎◎◎大版 全一拾
◎◎◎正價 四廿
◎◎◎郵稅 四廿

◎◎◎正價 三拾五
◎◎◎郵稅 四

◎◎◎上製金文字
◎◎◎定價 七拾
◎◎◎郵稅 八

農學博士 玉利喜造君著

冷水浴の實驗と學理

英國ノールソン博士著 海嶽生譯

思想健全法

細川潤二郎男題字 中村木公君編

名流婦人のかゞみ

樋口配天君著

默想

木内菊次郎君著

折紙と圖畫

中野觀象君編 島山觀成君書 (習字手本)

實用商業文練習帖

◎◎◎中版 全一五
◎◎◎正價 四廿
◎◎◎郵稅 四

◎◎◎中版 全一拾
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 四

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價 七拾
◎◎◎郵稅 八

◎◎◎中版 全一五
◎◎◎正價 四
◎◎◎郵稅 四

◎◎◎大版 全一五
◎◎◎正價 六
◎◎◎郵稅 六

◎◎◎大版 全一拾
◎◎◎正價 六
◎◎◎郵稅 四

米國リチャードソン氏著 實業之日本社譯
最新讀書法
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正稅四 拾 錢錢册

山方香峰君著(國語漢文研究法)
讀書便覽
◎◎◎三六版 拾 美
◎◎◎正稅四 拾 錢錢本

高橋五郎君著(苦心の名譽)
英語熟達法
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正稅六 拾 錢錢册

上海同文書院校友 谷原孝太郎君著
日清英會話
◎◎◎上製金文字 入
◎◎◎正稅八 拾 錢錢入

米國文學博士 梅田又次郎君著
在米の苦學生及勞働者
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正稅四 拾 錢錢册

佐藤青衿君著
學生の前途
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正稅四 拾 錢錢册

土屋長吉君著
商工執務法
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正稅六 拾 錢錢册

宮田千年君著
世界商業史綱
◎◎◎上製金文字 入
◎◎◎正稅八 拾 錢錢入

金澤商業學校教頭 中野觀象君著
最新外國商業地理
◎◎◎上製金文字 入
◎◎◎正稅八 拾 錢錢入

商品學專攻 渡邊久太郎君著
最新商品教科書
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正稅八 拾 錢錢册

土屋長吉君著
簡易商業學
◎◎◎上下 全二
◎◎◎正稅八 拾 錢錢册

土屋長吉君著
商家繁榮策
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正稅六 拾 錢錢册

實業之日本記者 岳淵生著
新時代之青年
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正稅六 拾 錢錢册

野田叱電君著
成功青年立身訓
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正稅四 拾 錢錢册

正岡藝陽君著
致富成業策
◎◎◎中版 全一
◎◎◎正稅四 拾 錢錢册

實業之日本社編纂
增補成功座右銘
◎◎◎袖珍 全一
◎◎◎正稅四 拾 錢錢本

實業之日本記者 藤原楚水君編著
美辭寶鑑
◎◎◎上製金文字 入
◎◎◎正稅八 拾 錢錢入

金澤商業學校校長 永野耕造君著
商業修身訓
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正稅四 拾 錢錢册

土屋長吉君著(訂正改版)
最新商業要綱
◎◎◎上製金文字 入
◎◎◎正稅八 拾 錢錢入

五十嵐次郎君著
最新商業算術
◎◎◎上製金文字 入
◎◎◎正稅八 拾 錢錢入

渡邊德兵衛君 共著
實用珠算教科書
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正稅八 拾 錢錢册

高間昭君 共著
最新珠算教科書
◎◎◎大版 全一
◎◎◎正稅六 拾 錢錢册

男爵後藤新平君 中橋德五郎君序
最新事務法
◎◎◎上製金文字 入
◎◎◎正稅六 拾 錢錢入

商業學士 小林行昌君下平精一君共著
英國商業實務
◎◎◎上製金文字 入
◎◎◎正稅四 拾 錢錢入

實業之日本記者 都倉義一君著

最新式記帳法

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價七拾 錢錢册
◎◎◎郵稅八拾 錢錢册

神戸高等東教授校閣 竹内正太郎君著

商業簿記獨修書

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價七拾 錢錢册
◎◎◎郵稅八拾 錢錢册

竹内正太郎 村瀬玄兩君共著

最新商業簿記

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價六拾 錢錢册
◎◎◎萬稅六拾 錢錢册

金澤商業學校教頭 中野觀象君著

單式簿記

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價四拾 錢錢册
◎◎◎郵稅四拾 錢錢册

日本石油會社 竹田常治君著

實用家計簿記

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價四拾 錢錢册
◎◎◎郵稅六拾 錢錢册

興石丑太郎君著

利廻早見表

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價四拾 錢錢册
◎◎◎郵稅四拾 錢錢册

土屋長吉君著

商戰必勝

◎◎◎中版 全一册
◎◎◎正價六拾 錢錢册
◎◎◎郵稅六拾 錢錢册

土屋長吉君著

店前裝飾術

◎◎◎中版 全一册
◎◎◎正價四拾 錢錢册
◎◎◎郵稅四拾 錢錢册

土屋長吉君著

商品と商業經營

◎◎◎中版 全一册
◎◎◎正價六拾 錢錢册
◎◎◎郵稅六拾 錢錢册

土屋長吉君著

商業智囊

◎◎◎中版 全一册
◎◎◎正價四拾 錢錢册
◎◎◎郵稅四拾 錢錢册

土屋長吉君著

折衷最新式簿記

◎◎◎中版 全一册
◎◎◎正價六拾 錢錢册
◎◎◎郵稅六拾 錢錢册

土屋長吉君著

最新販賣術

◎◎◎中版 全一册
◎◎◎正價六拾 錢錢册
◎◎◎郵稅六拾 錢錢册

村井弦齋君著

訂正婦人の日常生活法

◎◎◎全一册 美木
◎◎◎正價八拾 錢錢册
◎◎◎郵稅八拾 錢錢册

石塚月亭君編

弦齋夫人の料理談

◎◎◎全一册 美木
◎◎◎正價八拾 錢錢册
◎◎◎郵稅八拾 錢錢册

醫學博士 加藤照磨先生校閣
西谷龍顯君譯著

最新育兒法

◎◎◎全一册 美木
◎◎◎正價七拾 錢錢册
◎◎◎郵稅七拾 錢錢册

西谷龍顯君編者

婦人の重寶

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價六拾 錢錢册
◎◎◎郵稅六拾 錢錢册

堀内新泉君著

娘に與へたる母の書簡

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價四拾 錢錢册
◎◎◎郵稅四拾 錢錢册

婦人世界臨時増刊

食物かゝみ

◎◎◎正價拾五 錢
◎◎◎郵稅一錢五厘

山方香峰君著

日常生活衣食住

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價拾四 錢錢册
◎◎◎郵稅拾四 錢錢册

梅田嬌葉君著

家庭菓子製法

◎◎◎全一册 美木
◎◎◎正價五拾 錢錢册
◎◎◎郵稅六拾 錢錢册

本間鶴治君著

通俗家庭理科

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價八拾 錢錢册
◎◎◎郵稅八拾 錢錢册

赤堀吉松君
赤堀菊子君共著

日本料理法

◎◎◎大版 全一册
◎◎◎正價八拾 錢錢册
◎◎◎郵稅八拾 錢錢册

村井弦齋校閣

化粧かゝみ

◎◎◎正價拾五 錢
◎◎◎郵稅壹錢五厘

婦人世界編輯局編纂

衣裳かゝみ

◎◎◎正價拾五 錢
◎◎◎郵稅壹錢五厘

米國哲ミラー氏著 波多野鳥峯君譯

光榮ある生涯

◎◎◎中版 拾美
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢本

米國マーデン氏著 波多野鳥峯君譯

快活なる精神

◎◎◎中版 拾美
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 四拾 錢錢本

獨逸マイアー氏著 波多野鳥峯君著

樂天の勝利

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

鈴木孔龍君著 (青年必讀)

人生の光明

◎◎◎神珍 拾美
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 四拾 錢錢本

米國ラーチング氏著 堀内新泉君譯

不平慰安法

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 六拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

蘆川忠雄君譯

沈着心修養

◎◎◎中版 拾金
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 四拾 錢錢册

米國法學博士ゼレミヤホキップルセンクス氏著
獨逸哲學博士 農商務省書記官 別府丑太郎君著

産業合同論

◎◎◎上製金文字入
◎◎◎正價 八拾
◎◎◎郵稅 八拾 錢錢入

累代菓子製造家梅田橋菓新著

新案菓子製法

◎◎◎大版 拾美
◎◎◎正價 六拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢本

醫學士 小林行昌君 土屋長吉君共著

中等經濟學

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

法學博士 天野爲之君校閱
土屋長吉君著

應用經濟學

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

栗原亮一君序 淺井茂侃君著

最新農業經營

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

信州宮入良右衛門君著

經濟的育蠶法

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 四拾 錢錢册

實業之日本記者 嬌盜生著

獨笑珍話

◎◎◎神珍 拾美
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢本

實業之日本臨時增刊

樂天的處世法

◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢

英國フキリス著 蘆川忠雄譯

雄健の氣象

◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢

英國ゼローム、ケイ、ゼローム著
波多野鳥峯君譯

表面人生の真相

◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢

新渡戸博士序 山方香峰著

新武士道

◎◎◎上製金文字入
◎◎◎正價 八拾
◎◎◎郵稅 八拾 錢錢入

法學士 工藤重義著

經濟財政要義

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 八拾 錢錢製

在上海 長谷川宇太治君著

渡清案内

◎◎◎中版 拾金
◎◎◎正價 六拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

加藤政之助君著

韓國經營

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 六拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

加藤政之助君著

滿洲處分

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 六拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

カーネギー翁著 伊藤重次郎君譯

實業の鍵

◎◎◎大版 拾金
◎◎◎正價 六拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

米國富豪カーネギー翁著
男爵澁澤榮一君序 小池靖一君譯

實業の帝國

◎◎◎附錄カ 拾五
◎◎◎正價 六拾
◎◎◎郵稅 六拾 錢錢册

米國自成的成功者 伊藤重次郎君譯
男爵岩崎彌之助君序

富の福音

◎◎◎上製金文字入
◎◎◎正價 四拾
◎◎◎郵稅 八拾 錢錢

文學士 久保天隨君著

實用作文法

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價四拾五錢
◎◎◎郵稅六錢

文學士 久保天隨君著

書信文作法

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價四拾五錢
◎◎◎郵稅六錢

文學士 久保天隨君著

敘事文作法

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價四拾五錢
◎◎◎郵稅六錢

文學士 久保天隨君著

論文作法

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價四拾五錢
◎◎◎郵稅六錢

文學士 久保天隨君著

儀式文作法

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價四拾五錢
◎◎◎郵稅六錢

文學士 久保天隨君著

美文作法

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價四拾五錢
◎◎◎郵稅六錢

鶴飼天淵君編纂

文章大成

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價八錢
◎◎◎郵稅八錢

鶴飼天淵君編纂

書信文大成

◎◎◎上製金文字
◎◎◎正價八錢
◎◎◎郵稅八錢

三輪田真佐子序 鶴飼天淵君著

婦人消息文

◎◎◎大版
◎◎◎正價八錢
◎◎◎郵稅八錢

金澤商業學校教頭 中野觀象君著

商業書信文範

◎◎◎大版
◎◎◎正價八錢
◎◎◎郵稅八錢

商業學士 小林行昌君著

英和商用文教科書

◎◎◎上版金文字
◎◎◎正價四拾五錢
◎◎◎郵稅六錢

早稻田政學士 瀧清君著

商業書簡と書式

◎◎◎中版
◎◎◎正價四拾五錢
◎◎◎郵稅四錢

西岡英夫君著

立身と繁昌

◎◎◎全
◎◎◎正價廿五錢
◎◎◎郵稅四錢

東京日々新聞記者 市吉徹夫君著

地理と商品

◎◎◎中版
◎◎◎正價廿五錢
◎◎◎郵稅四錢

西岡英夫君著

商人と文章

◎◎◎中版
◎◎◎正價廿五錢
◎◎◎郵稅四錢

東京日々新聞記者 市吉徹夫君著

銀行と會社

◎◎◎中版
◎◎◎正價廿五錢
◎◎◎郵稅四錢

西岡英夫君著

商賈と勘定

◎◎◎中版
◎◎◎正價廿五錢
◎◎◎郵稅四錢

蘆川忠雄君著

日常の言語

◎◎◎中版
◎◎◎正價廿五錢
◎◎◎郵稅四錢

金澤商業學校教頭 中野觀象君 高間昭君 共著

新商業書信活法

◎◎◎大版
◎◎◎正價八錢
◎◎◎郵稅八錢

江口岳東君著

實業大家 獨立自營

◎◎◎中版
◎◎◎正價四拾錢
◎◎◎郵稅六錢

男爵前島密君著序 澤村菊池兩君共著

實業實業指針

◎◎◎大版
◎◎◎正價八錢
◎◎◎郵稅八錢

藤岡秀太郎君著

商品と其荷造法

◎◎◎正價五拾錢
◎◎◎郵稅八錢

土方伯題字 今井忠雄君著

東亞の滿洲案内

◎◎◎中版
◎◎◎正價六錢
◎◎◎郵稅六錢

醫學得業士 武藤喜作君著

家庭應急手當法

◎◎◎正價四拾錢
◎◎◎郵稅六錢

の一本日

誌雜業實

實業之日本

一冊 價拾壹錢 郵稅
○月二回一日十五日發行
○十二冊前金郵稅共壹圓
○五錢廿四冊共拾圓
一ヶ年定期増刊共參圓也

本誌は左の問題を悉く解決す

如何なる實業の方法が成功するか
如何なる人格の人が成功するか
如何なる體格の人が成功するか
如何なる商業の主人が成功するか
如何なる心得の店員が成功するか
如何なる心得の職業者が成功するか
如何なる種類の外職業者が成功するか
如何なる海外發展者が成功するか
如何なる處世法が成功するか
如何なる新奇の工夫が成功するか

如何にして獨立自營すべしか
如何にして失敗を避くべしか
如何にして健康を増進すべしか
如何にして職業を獲すべしか
如何にして品性を修養すべしか
如何にして顧客を吸引すべしか
如何にして海外に航すべしか
如何にして記憶を健全にするか
如何にして人生の慰安を得るか

右の問題を確解決する者唯本誌のみ

やあり人ひ苦に題問の下

の一本日

誌雜人婦

婦人世界

一冊 價拾五錢 郵稅
○月一回一日發行
○六冊前金郵稅共九圓
○拾錢十二冊共拾七圓
五錢郵券代用一圓割増

本誌は左の婦人問題を悉く解決す

如何なる幸福の婦人となるか
如何なる結婚は如何にすべきか
如何なる家庭を樂しくするか
如何なる養育すべきか
如何なる養育すべきか
如何なる養育すべきか
如何なる養育すべきか
如何なる養育すべきか
如何なる養育すべきか
如何なる養育すべきか

如何にして保つべきか
如何にして治療すべしか
如何にして整理すべしか
如何にして着用すべしか
如何にして料理すべしか
如何にして使用するべしか
如何にして方法にすべしか
如何にして職業が女子に適するか
如何なる趣味は如何なるか
如何なる職業が女子に適するか

右の問題を悉く解決する者唯本誌のみ

やあり題問人婦に外此